
ネギま！に入った人。

鋤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！に入った人。

【Nコード】

N9455V

【作者名】

鏝

【あらすじ】

神に作られた存在が2度目の生を謳歌します。しばらくは順調にすすんでいく……かな？

ハーレム化計画が進行中。ヒロインは夕映・真名・楓・オリキャラ二人です。

エヴァ・アキラも入れようかな……？とか考えております。キャラ崩壊等の成分が多く含まれることになると思います。まあ、めどが立ち次第戻しますが。

1 こんな始まりでいいのか。(前書き)

すみません。いろいろ手違いです。こっちで進めていきます。

1 こんな始まりでいいのか。

「で、ここはいずこ？」

いかにも応接間、といった感じの部屋だな。

「わしの面接室。」

目の前には威厳がありそうでない爺さん。

「……で、ふーあーゆー。」

「あいあむあーつど。」

……。

「まあ、元気だして、お爺ちゃん。」

「視線が！視線が突き刺さるように痛い！」

「で、本当はなんなの？」

「一応ほんとに神じゃよ？それも最高位。」

「じゃあその神様が俺みたいないたいけな一般人に何の用でし？」

「お主、無駄に落ち着きすぎじゃ。まあ、魂がそれでは仕方ない、か。それから。なあにがいたいけな一般人じゃ、ジークル博士。」

「さすがにばれてーら。でも大したことじゃあるめえ？」

ハイド氏は今おねむのようで。

「それが大したことなんじゃよ。お主の場合、あれじゃ。ブリーチの虚暴走時なみにやばいんじゃないよ。」

「それは自覚してるけどね。」

「それがイレギュラーでな。お主の魂は…その、ある戦争で死んだ人間達のほぼ全員の魂を混ぜて合わせて整えていない部分を燃やして出来た核の部分から出来たすばらしい密度の物でな？わしでも焼却が難しいのじゃよ。」

「出来るのにやらないんだ。というか何故作った。」

「とある神兼マッドサイエンティストがお。もう消したが。それで、二重人格の原因はじゃな、その核のエネルギーにお主の魂が狂わないように出来た一種の自衛装置なんじゃよ。」

そんなにやばいもんなのか…。

「じゃからの？お主をネギま！？の世界に送って、焼却の手間を省こうと思っのじゃ！」

結局お前が楽するためですか。

「まあ、焼却されないなら何よりだが。……というか、すでに記憶消えてね？」

「うむ。消えたな。原作も完全に忘れたじゃろ。」

「そこが目的でしたか…。」

自分の名前まで忘れちゃったよ。

「いや、本当は転生者の記憶は消さないんじやが、まあ、のお。」

気紛れですか。

「っていつか、早く行きたいです。」

「そのまま行ったら常にハイド氏に任せないと死ぬぞ？」

じゃあどうするんだよ。

「パワーアップとかするの？」

「というか、お願い事を五つ聞いてやろう、みたいな感じじゃ。あ、でもやっぱりこの中から五枚引いて。」

「言ったことをすぐに取り消すって…仮にも神でしょうに…。」

「まあまあ。」

うん、引いてみよう。

一枚、二枚、三枚、四枚、五枚！

「うむ、いちいち確認しないで引っこ抜いたのはお主が初めてじゃ。」

気に入った。もう一枚許可、じゃ。」

お、ラッキー。

六枚目、つと。

はい、では確認。

『アラガミ：ハンニバルを召喚・従属・融合』

『翼』

『気の量EX・気の固形化』

『アイテム欄が存在』

『忍法骨肉細工』

『能力を一つ生産』

分かんないのは神様に説明して貰った。

なんかハンパない。

ちなみに能力の生産は暗器術、というか真庭蝙蝠の能力。骨肉細工とあわせるとまんま蝙蝠。

ちなみに知識はほぼ消えかかっていたので、覚えていた中から選んだ。

ちなみに翼を生やすと目が真っ赤になって瞳孔が縦に裂けるらしい。
何故？

はあ、まあいいや。能力の確認はこっちでやった。

「ひと通り終わったようじゃの。ではその扉を出るのじゃ。」

「ああ。世話になったな、神様。」

「ではな、ジーキルよ。他の転生者は悪い輩ではないからの。仲良
くしてやってくれ。」

そんな感じで、扉を開け…

意識が、吹き飛んだ。

目が覚めると、知らない天井だった。

これも何のネタか忘れた。

「産婆さん！赤ちゃんが泣かない！」

「背中を軽く叩け！」

そんな声と同時に背中を叩かれる。

ああ、泣けばいいのか。

「あぎゃー。」

やべ、超棒読み。

「随分白々しい産声の赤ちゃんもいたもんだなあ……」

そんな声と同時に、段々眠くなり……瞼を下ろした。

1 こんな始まりでいいのか。(後書き)

不定期更新になるとおもいますがよろしく願います。

2 あいも変わらずくだぐだ。

2年が立ちました！

ここがどこか判明。甲賀の里。まさかの忍者大国。ちなみに俺の名前はまさかの『鑓 銀次』。虚刀流は使わないが。このシリーズは一巻、二巻くらいの内容は覚えている。

里には、一つ年下の「長瀬楓」という子がいた。どつかで聞いたよ
うな…？

さらに5年が立ちました！現在7歳。

忍術修行に楓と共に励む日々。

現在は休憩中。

「銀くんは天才でござる。しかし、何故皆の前では本気を出さぬでござるか？」

「目立つのが嫌いなんだよ。能力バレたくないし。」

ちなみに能力の話は楓しか知らない。少し前に話したが、「すごいでござる！」とかキラキラした目で言われた。まあ、ハイド氏のこととは楓も知らないが。こっち来てからは何故かハイドさんが凄く大人しい。

「…ふむ、そうござるか。能力については、まあ、納得でござる。」

そんなお話をしました。

修行を適当な所で切り上げて、家に戻る。

夕食の後。

「父上、母上。お話が御座います。」

「どうした、かしこまって。」

「旅に、出たいので御座います。」

その言葉に、二人が正座し、真面目な顔になる。

「銀次、それには目的はあるのかね？」

勿論だ。

「妹分たる楓を守れるだけの力をつけるため、世界を見てまわるためです。」

「いつかその話をすると思っていたんだけどね。あなたにそれだけの覚悟があるなら、止めないわ。」

「お前の『力』については、俺と母さんの両方が知ってる。そのこ

とで旅に出るんだつたら止めたんだが、な。」

バレて、いたか。

「あの異形を知りながらもいつも通り振る舞ってくれて、ありがとう、母さん、父さん。」

気がつけば俺は、泣きながら二人に抱きついていた。

よく考えたらこっちに来て泣いたの初めてな気がする。

翌朝。

「楓ちゃんとは本当に会わないのか？」

「ああ。いつか、必ず戻ってくるから、待ってろ、って伝えてくれ。」

「まるでプロポーズね…。」

「かつ、母さん！？何言ってるの！？」

あーもう！グダグダだ！

「それじゃ二人とも！行ってくる！」

「「行つてらっしゃい！！」」

こうして旅に出た俺だが、色々回って色んな人と知り合い、金を稼ぐために『真庭蝙蝠』と名乗って仕事をした。おかげでその名前は裏社会の有名人になってしまった…！

ちなみに大学を飛び級で卒業した。

1人でなんとかやってつたお陰で能力もほぼコントロール出来るようになった。

未だに他の転生者とは会わない。というか原作のことを全く覚えていない。もしかしたらもう始まっているのでは？とも思うが、別にどうでもよかったりする。

旅に出て2年目、俺は拳術師に弟子入りした。

俺以外に弟子はいない。

師匠は女で、しかも美少女だった。名は『鏖 姫香』。

雑用やら何やらをやりながら修行を続けている。

強くなれるか…。

2 あいも変わらずくだぐだ。(後書き)

2 話目・・・なかなか難しい・・・。

3 ついに原作に近づく！（前書き）

ありがちな鈍感主人公を作り上げてしまった・・・orz

3 ついに原作に近づく！

鏝師匠の元修行を始めて5年。俺ももう15だ。

鏝師匠は凄く強い。本来肉弾戦用の特典を付けて貰っていない（伸びは青天井だが）俺では太刀打ちできない。

まあ、ハンニバルを融合させてやったことは無いけど、多分ギリで勝てる程度の気がする。

「おい銀！手紙見てきてー！」

「了解です。」

ちなみにこの家、普通の一軒家に道場がくっ付いた形である。よってポストとかも普通にある。

門の所で手紙を確認すると、なんとビックリ、俺宛の手紙があった。差出人は……両親。連絡先は教えておいたが、手紙なんて滅多にこない。

居間に戻り、師匠に朝飯をよそつてから手紙を開く。

「なんだ、銀宛の手紙か、珍しいな。」

「両親からですよ。」

「そうか。どんなことが書いてある？」

「ちょっと待ってくださいね……………」

……………。

「あー、師匠、俺、麻帆良に行くことになりました。」

「……………へっ?」

絶句してる。超美人だから絵になる。ちなみに年齢はなんと18歳。俺が弟子入りしたときは三つしか違わなかったらしい。この点は、まあ当時幼女だったから分かったが、すごいわ。毎日模擬戦はしてる。

師匠との戦績はここ一年で0勝約1300敗約500引き分け。しかもハンデ付けて貰ってこれ。

勝ち星が全然付かない…。

「ちょ、ちょ、ちょっと銀、それはどういう意味!?!」

あ、フリーズから回復した。

「どうにも、近々来ることになった英雄の息子のサポートの為に若い輩を里から出すことになったらいいんすけど若い人間が俺と楓の二人しかいないんすよ。」

「何よそれ!ぶう!」

やべ、可愛い。

「まあ、休みの日には必ず来ますから。そんなに遠くないっすし。」
それから、あんな態度を取られると勘違いしそうになる。度々あるが、心臓に悪い。

「あ、そうだ。アタシも行くわ、麻帆良！」

「駄目っすよ！あそこ学園都市っすから仕事がないと駄目です。」

「じゃあ仕事取れたら行っっていいのね？」

「ま、まあ、そうですね。」

「じゃあ取れ次第行くわ。待つてなさいよ。」

いやあ、可愛いなあ畜生！でもさ、

「どうしてそんなに一緒に来たがるんすか？」

「えっ！？／＼／＼／＼それはまあアレよ。うん。そう、修行をし
つかり終わらせるまで心配だから行っってあげるのよ、うん。」

あり？顔が赤いぞ？

熱を計るが…まあ、大したことはないな。

そうそう、熱を計るって言えば、最初の頃おでこぶつけたらすげえ怒られた。嫌われたかな……？とか思ってたけど、そんなことはないらしい。…どうしたんだろ。

それ以降は手を当ててる。

「じゃあ、期待しないで待ってますよ。」

「えっ、ええ、待つてなさい！……それで、いつ行くことになつてるの？」

「明日。」

「は、ハアアア！？明日！？」

「はい。明日です。」

最悪なことに。

「もう、なんでそんなにきなりなのよ……。」

まったくです…。

取り敢えずその日の模擬戦ではボコボコにやられた。

八つ当たりはよくないよ師匠……。

翌日。

「じゃあ師匠、行つて来ます。それから、恋人くらい作ってくださいよ？年頃で美人なんですから、色んな人が狙ってますよ。勿体ない。」

「……………バカ。」

「へ？」

「このバカ！さっさと行ってこい！！」

あり、恋人いないの気にしてた？

「う、はい、行って来ます。」

「すぐ仕事取って行くからね！」

さあ待ってるよ麻帆良！

電車で移動中…

「着いた…」

乗り物とか15年前に前世で乗ったきりだったから酔った。むしろ人に酔った。

女子中等部で迎えの人と待ち合わせてるんだっけ…。よし、行こう。

……………。

15分後。

迷った……。

地図は見たんだがな……。どーしたもんか……。

「よし、交番を探そう。」

……………。

さらに15分後……。

「迷ったorz」

俺って何？方向音痴？

「あ、あのー、どこに行きたいんですか？」

振り返れば、中学生くらいの女の子。

「助かった……。」

「え、えと、大丈夫ですか？」

「うん……。女子中等部の入口辺りで……。えと、高畑っていう先生

と待ち合わせしてるんだけど…、」

「あ、じゃあ案内するです。」

「すまない、助かる。」

「気にしないでいいです。」

そして、しばらく歩くと待ち合わせの場所に着いた。

ここさっき3回くらい通った……。

いつから俺はアホの子になった？

「あ、来たみたいだね。」

「スイマセン、遅れました。」

「いや、いいよ。綾瀬さんもありがとうね。」

「大丈夫です。では。」

「ありがとうな嬢ちゃん…。」

「いえ、気にするな、です。」

そういつて先にどっかに行く綾瀬嬢。

「じゃあ改めて、タカミチ・Ｔ・高畑です。よろしく。」

「鑓 銀次です。こちらこそよろしくお願いします。」

「じゃあ、行こうか。」

しかし、学園長室が何故女子中等部に？まさかロリコ……いや、それは気にしたら負けだな。

コンコン

「入ってくれ。」

「失礼します。学園長、鑓君をつれてきました。」

「うむ、ご苦労じゃった。……鑓君、何故絶句しておるのじゃ？」

い、いや、だって学園長。

「よ、よ、よ、妖怪!？」

「いや、わし人間じゃよ。」

「マヂですか？」

「マヂ。」

ワオ。

「ま、まあ、鑓君、君にはここで生徒としてやってもらっ、と言ったんじゃがな？色々と都合が合わなくての、女子中等部の体育科教師として赴任して貰うことになった。」

教師、ツスカ。

「まあ、給料貰えるならいいですけど。」

「それから、深夜の警備も頼みたい。」

「まあそれもべつにいいです。給料はでますか？」

「もちろんじゃ。」

そんな感じで仕事がきまりますた。

「それで、住むところなんじゃが、副担任になっておる先生で丁度アパートやらなんやらが一杯になってしまつての、女子寮の管理人室しかあいてないんじゃないや。じゃから管理人をやってもらえんかの？。」

「管理人室なら、なんとか。」

さすがに女子寮はまずいと思うが、管理人室くらいならかまわないだろ。……かまわないよな？

「うむ！では早速明日から仕事を頼むぞい！」

はあ。

面倒臭そうだな。

翌日。

副担任だと言う鬼村 迅さんとともに2「Aに向かう。

ちなみに担任は、まあすぐに英雄の息子とやらと変わるらしいが、高畑先生がやっているらしい。

「緊張しているかい？」

「まあ、多少はしてますね。」

「まあ今日は2「Aに挨拶するだけだからね。気楽にいつてきな。」

「了解です。」

扉の前に立ち、開く。

上から落ちてくる黒板消しをキャッチし、下のロープをスルー。落ちてくるバケツをキャッチし、飛んできた矢は口でキャッチ。両手塞がってるし。

教卓にバン！と手をついて厳かに喋り出す。ちなみに矢はもう吐き出した。もってたゴミ袋にin！

「……………よろしく」

一昔前の漫画みたいにずっこけた。鬼村先生含め。

まあ、最初の挨拶としてはこれでいいだろう。――（↑よくないよ！）

「じゃあ気を取り直して、俺は鑓 銀次。新しく赴任してきた体育

科教師だ。今日は挨拶に来た。以後よろしく。」

クラスを見回す。

見知った顔が…1、2、あ、楓じゃん。3、4、5人くらいか…。

ふむ…。って、何故エヴァがまだ学校に！？……あ、登校地獄だっけ…？

「うーん、かつこいいけど…」

「地味、というか特徴がない、というか…」

クラスの皆さんからの俺の評価。ちなみに今の俺は生まれたままの^{美少年？}微少年。ちなみにクラスの知った顔の方々とはみんなこの姿で会ってる。

「あー、なんか聞きたそうにしてる連中もいるな。後で個人的に聞く。俺は女子寮の管理人室に住むことになった。夕方にでも来てくれ。」

そんな感じで教室を出て行く。

その日は授業はなかったので管理人室に行き、部屋の荷物を片付ける。――（ちなみにアイテム欄には持ち運ぶ大きな物しかない。）

もしかしたらマナが楓辺りにボコられるかも…。急に消えたし。エヴァとかには挨拶しといたんだがなあ…。

とりあえずは昼寝しよう…。（人はこれを現実逃避という。）うる

さい作者！

「zzzzz・・・」

コンコン、

ノックの音で目が覚める。

時間的には…まあ多分知り合いの誰かだな…。

「はいよー。」

ドアを開けると、楓がいた。

「よお楓。久しぶへブアツ！」

ビンタされた。錐揉みして落下した。痛い…。

「銀くんは！7年前に！挨拶もなしに！出て行った癖に！謝罪の！
つも！なしでござるか！」

怒鳴られた。まあこの件に関しては俺が一方的に悪い。

「あ、ああ、すまん。でも伝言はあつたろ？」

「あ、あれは…その、卑怯でござる！／／／」

何が！？

「え、えっと、いまいちよくわからんが、急に飛び出したのは謝る悪かった。」

「うむう……まあ、分かったでござるよ…。」

た、助かった。

「それにしても、今日の来客は拙者が初めてでござるか？」

「ああ。なんか来そうなやつでもいたのか？」

「うむ。朝倉和美という新聞部の女がいて、新任の教師にはたいてい真っ先に質問に行くはずでござるが・・・周りに洗つつもりか・・・」

「ま、まあつかつに自分のことをしゃべるほど俺も馬鹿じゃない。」

「それでも気をつけてほしいでござる。銀くんは口が軽かったでござるからな。」

まあ昔はそうだったが今はそんなことない・・・はず。

「それで？学校ではどうなんだ？成績は？」

「うぐ・・・」

その後30分位話して楓は帰って行った。

そして、楓が出て行って15分程後、マナがやってきた。

「やあ、銀。6年ぶりくらいかい？」

「そうだなー。マナとは大体半年くらい一緒に行動してたし。」

「だが、何故あんなにいきなり、何も言わずに消えた？私達がどれだけ心配したと思ってる？」

「いや、本来の目的が色々な所を旅して、力を付けることだったからな。」

2年でめばしいところは回っちゃったけどな。

しかしマナよ。お前はこの6年で一体何を食ったんだ？

けしからん体しておって…。

「そうか。まあ、無事ならいいんだがね。」

はッ、いかんいかん、話題を変えねば。

「そうだ、所でアイツはどうしてる？」

アイツとは、マナのパートナーをやっていた男。多分両思いなんだろう…これは俺の勘だが、あれだけ仲がよかったからな。

「ああ…彼なら死んだよ。」

「……そう、か。お前も…なんて言うか、こう、忘れるとは言わないが、あれだ。お前なら大丈夫だとは思うが、一応言っとく。いつまでも死んだ人間に捕らわれないようにしろよ。」

「…………何を言っているんだい？」

…へ？

なんか怒ってる、かな？

「いや、だってお前、アイツのこと…その、好きだったんだろ？つてこと。俺がお前達2人から消えたのだって馬に蹴られたくないからっていうのもあったし。」

空気を読んだつもりだ。

「…………最低。」

バッチイイン！！！！

思いつきりビンタされた。楓と同じところ。楓のは跡が残らない程度だろうが、これは間違いなく残る。

「…え？いや、なんか俺言ったか？」

「私の前から何も言わずに消え去った理由が勘違い…だあ？ふざけるなよ！」

ツカツカツカ、ボタン！

出て行ってしまった。

…勘違い？何が？どこが？もしかして好きじゃなかった？いやそんなはずは…？

結局俺は理解できず、痛い頬に湿布を貼って、その日は寝ることにした。

3 ついに原作に近づく！（後書き）

このままハーレム一直線でいいのか不安です。

4 予想以上に短いorz（前書き）

他の転生者の視点を入れてみました。どうかな？

4 予想以上に短いorz

今回はこの俺、鬼村 迅がお送りしよう。

突然だが、俺は転生者だ。

前世の最期は、車にひかれそうになった女の子を突き飛ばしてドン。
タイミングよく死んだ俺は神様のお眼鏡にかなった人格者らしく、
チートな能力を引っさげてネギま！の世界に生まれ変わった。どんな能力かは秘密だ。別に原作とかはどうでもいいが、好きなキャラクタークらいは落としておきたいと思うのが男の性。取り敢えずは佐々木と綾瀬を落としたい。

あとは、クラスに原作にはいなかった女子がいたので接触したところ、彼女も転生者であることが判明し、前世の話や能力の話などで盛り上がった。名は月崎蒼乃。なんとなく型月な薫りがする。彼女は現在エヴァンジェリンとも友好な関係を保っているらしく、現在は封印をとくことを頑張っているらしい。ちなみに彼女もチートな能力がついていた。まあ正義の魔法使い共には目をつけられているらしいが。俺？俺は目立たないように行動してるからな。え？警備の顔合わせでタカミチを圧倒した？ナンノコトヤラ。

今でもたまに一緒に遊ぶ程度には蒼乃とは仲がいい。

後の問題は、新しく赴任してきた体育科教師。鑓 銀次。苗字が気になる。……刀語、だよね？学園長曰わく甲賀の里から派遣されたネギのサポートらしい。原作にも居なかったので、おそらく転生者だろうが、どうにもコンタクトが取れない。取り敢えず今日は警備

の顔合わせがあるはずだ。そのときにでも手合わせを頼もう。

しかしこの男、クラスに知り合いが多らしく、彼の顔を見た生徒が何人か驚いていた。しかも一様に魔法関係者。…綾瀬は別だが。綾瀬あ落とさないでくれよ？俺が狙ってるんだから。

まああの罨を破ったのはなかなかやと思う。

ふふふ、面白くなってきたじゃないか。昼ドラ的な意味で。

4 予想以上に短いorz（後書き）

月崎視点は後々やる予定です。次はようやく戦闘シーンになるかと。

5 戦闘が短い。(前書き)

戦闘シーンって難しいですねー・・・

5 戦闘が短い。

第3話の翌日。

……失礼、電波だ。

マナに頬を張られた翌日。

Aの連中とは会っていない。

俺はその日、2―Bの授業を受け持った。Aと違って落ち着いたクラスで、やりやすかった。

授業後、職員室で珈琲を飲んでいると高畑先生が寄ってきて、

「今夜10時に、世界樹の下に来てくれるかい。警備の顔合わせをするから。」

と言った。

そついやそんな仕事もあったな。

そんなことを考えながら、俺は適当に頷いていた。

時は移り、放課後。

管理人室でまどろんでいた俺は、ノックの音で目を覚ました。

……なんか昨日も似たようなことあったな。

くだらないことを考えながら扉を開けると、パイナップルなヘッドをしたガールがスマイルでスタンドしていた。

失礼。

変わった、しかし妙に似合う髪型をした女子が笑顔で立っていた。

かなりどうでもいい内容。

「……………A組にいた、朝倉、だったか？」

「お！覚えてるのかな？そうだよー、麻帆良のパパラッチ、朝倉和美でーす！」

よく考えたら昨日楓が言ってたのはこいつか。

変に口を滑らせないように気をつけよう。

「何の用だ？」

「はい！鬼村先生についてやってきた、若い先生のプロフィールを、と思ひまして！」

「ふむ。」

これならあまり掘り下げられることはない、かな？

「まずは名前と年齢、誕生日、身長体重を教えてください。」

「鑓 銀次。15だ。誕生日は4月2日。身長は170cm、体重は58kg。」

「15！？一つしか変わらないの！？」

「なんだ、老けて見えるか？」
「にやにや。」

「い、いえ、15で先生っていうのに驚いただけで…。」

「そうか。じゃあ質問を続けてくれ。」

からかってすぐ真面目な顔をする。こうすれば主導権を得やすい。

はいここテストに出ます。

はい先生、教科はなんですか？

保健体育です。

そう聞くと主導権ってなんかえつちいですね。

下らないことを考えてしまった…。

「あの、先生。趣味特技を教えてくださいな？」

「お、おお。趣味は人間観察、特技は声帯模写だ。」

「あ、ではそれ、やってもらえます?」

面倒臭いが、まあいいや。

「分かった。ちょっと耳ふさいでくれるか?」

「?はい。」

……ゴキツ、バキツ、ゴリユツ……

耳をすっかりふさいでいるのを確認し、忍法骨肉細工の応用で、喉だけを朝倉の物にする。観察していれば喉の形くらいはわかるからな。

形を叩き、手をはずさせる。

「ほれ。これでどうだ。」

「……!私の声……!」

「うまいもんだろ?じゃあもっかい耳ふさいでくれるか。」

ふたたびグロい音とともに喉を戻す。

「凄いです!…ふふふ、いい記事が書けそうだ…!先生ありがとうございました。」

そんな声を残してスキップでもするかのように軽い足取りで部屋を出て行った。

変な女。

……… ってもう9:50じゃねえかあ！間に合わない気がする……。

ダッシュで向かう。

……… 5分後。

「迷った……。」

デジャヴ。

一昨日、いや昨日か。

（どうして世界樹が視界にあるのに迷うのかは不明である。）

一方その頃世界樹の下。

「こないのっ……。」

学園長。

「忘れたんでしょうか……？」

タカミチの言葉。これに、

「迷ってるんじゃないですか……？」

葛葉刀子が反応する。

「……………あ。」

タカミチが呟く。

「どうしたんじゃタカミチくん？」

「いえ、彼、素晴らしい方向音痴なんです…。待ち合わせにも40分近く遅れるし。」

「さ、探すぞい！探索系の魔法を使える魔法先生、魔法生徒は各自探してくれ…。」

銀次に戻る。

「あ、すいません、世界樹ってどこですか？」

「ああ、あの大きい木ですよ。」

「あ、ありがとうございます。」

テクテク。

「何故反対側に行くんですか!？」

「え?……あつ、すいません!あっちだった!」

「大丈夫かよ……。」

その日から、さまよう青年が出没する、と麻帆良の七不思議が追加されたという。

「鑢くん。」

「……ああ、鬼村さん。すいません。世界樹まで案内してもらえます?」

「ああ、いいよ。元々そのために来たからね」

しかし、彼の気配小さかったな。気づいたけど。

「なんでです?」

「君、方向音痴でしょ?それも口口ノア級の。」

「ろろのあ…?いやいや、俺は方向音痴じゃありませんて。」

「自覚なかったの?というかゾロ知らないのか?」

どっかで聞いた気はするが…。

「知らないです。」

「いや、だが…まあ、いいや。取り敢えず行くよ。」

「あ、はい。」

やっと思けるな。

「なんで俺と逆に行くのさ！」

「いや、近道かな、と。」

「世界樹と反対方向だよ！」

そんなこともあったが、着いた。

やべ、みんないららしてるかも。

「すみません、遅れました。」

「ああ、ご苦労じゃったな、鬼村くんも。…さて、では紹介しよう。
新しく警備に入った鑓 銀次くんじゃ。仲良くやってくれ。」

「よろしくおねがいします。」

「失礼ですが学園長、彼の實力はどうなんでしょうか。」

質問する堅物っぽい雰囲気の色黒の人。

「うむ、それについては、今から模擬戦を行って貰うんじゃが、鑓くんはどの様なスタイルで戦うのじゃ？」

「そうですね…一番は肉弾戦、二番が中距離で、遠距離はちょっと狙撃をかじった程度ですかね。」

「武器は使うのかの？」

「そうですね、使ってもそれなりに戦えますがなしの方がいいですね。」

嘘だけど。

「ふむ……。じゃあここは俺がやろう。」

鬼村先生かあ…。

「俺個人としては高畑先生と戦いたいんですが。」

おもに技を盗む為に。師匠のもと修行するうち、見た技を暫く練習すれば、大体は使いこなせることに気付いた。

「ああ、構わないよ?」

「だからさ、俺とやろうぜ?」

「いやですよ。鬼村先生相手だと勝てませんからね。」

嘘だけど。

「ふむ。まあいいか。しかしそれだとタカミチには勝てると聞こえるぞ?」

「ええ、まだ鬼村先生よりは可能性ありますからね。」

さつき高畑先生に鬼村先生が勝ったと聞いたし。

「じゃあここは間を取って私にしない?」

新しく誰か出てきたよ。つか間取ってねえよ。

「えーっと、確か……月崎蒼乃だっけ？2―Aの。」

「ええ。面白そうでしょ？私とやるの。」

「鑓先生、彼女は悪の魔法使いにっているんです。止めた方がいいですよ。」

堅物先生、悪の魔法使いつて誰なの？

と俺が言う前に、月崎、鬼村先生、高畑先生の三人が聞く。

「『誰と戦る？（ります？）』『』」

「えっと、じゃあ、高畑先生おねがいします。最初からそのつもりだったし。」

後ろで二人が舌打ちした気がするけど、そんなことはないよね？

「よし、じゃあ頼むよ。」

「はい。」

「では、始めるぞい。」

まずは、小手調べだ。

【鍔拳術・壱の構え・流】

膝を落とし、手を上段に構える。

高畑先生はスーツのポケットに手をつ突っ込んでいる。

俺は動かない。

一瞬、ヒュッ、という音と共に高畑先生の腕が動いた。

俺は腕に気を流し、後ろへ受け流す。

右左上下中上右右下左上上…。

「きりがないね…。」

そういつて距離を取る高畑先生。俺も深追いはしない。

これは大技来るかな…。

腕を軽く後ろに引いておく。

「じゃ、行くよ。豪殺居合い拳！」

【鑢拳術・鉄甲双掌】！

気の力と角度計算により力の上がつた双掌で受ける。

敢えて相殺せず下に弾く。

撒き散らされる砂煙に隠れ、上に飛ぶ。

すぐに居合い拳の連発で煙を飛ばされるが、すぐには俺に気づかない。

【鏖蹴術・跳躍蹴落】！

落下の勢いと気に乗せたオーバーヘッドキック。

「くっ、」

腕をクロスさせて防ぐ高畑先生。

蹴った勢いを利用して後ろに飛び退く。

「防戦一方だ。本気を出させてもらおうよ！」

「右手に魔力、左手に気」

「合成！」

「咸卦法！」

途端に早くなる高畑先生。

だけど、まだ追えるな。

いや、ここで目立ちすぎるとよくないか。適当に一発貰っておこう。

俺はダメージを最小限に抑えた状態で、高畑先生の拳を受ける。

自ら後ろに吹っ飛び、派手な演出をする。

「それまで!」

学園長の声。まだ余裕で起き上がれるが、しばらく寝ておこう。

「うむ、タカミチくんに本気を出させたしの。それなりの使い手のようじゃ。」

薄目をあけると、こつちを軽く睨む学園長。バレてるなこりゃ。あとバレてるのは……鬼村先生、月崎、高畑先生、くらいか。マナは……俺と顔を合わせたくなって来てないしな。それから高畑先生の技は使い勝手が悪いな。

そんなことを思いながら、解散した。

解散した後、バレてた4人が

「ありや本気の半分も出してないな。」

「やはりそうかの?」

「ええ。いくら咸卦法が強力だといってもあそこまでの防御能力を持った彼を一撃で倒すのは無理でしょう。あそこまで吹っ飛ぶわけもない。」

「そうね。大方目立ちたくないとかいう理由なんじゃない?」

とかいう会話をしていたことには、気づかなかった。

5 戦闘が短い。(後書き)

自信がない・・・

10/04 月崎さんの一人称及び会話を一部変更しました。

6 日常というのはどうにも難しい。(前書き)

夕映との接点をふやして見ました。

6 日常というのはどうにも難しい。

どうも、みんなのための鑓 銀次です。

昨日、高畑先生に負けたふりをした俺ですが、マナに避けられています。

というが無視されています。

今日の放課後、つまりついさっき訪ねたところ、変わりに出てきた桜咲さんに

「会いたくない、だそうです。」

と言われてしまいました。

あー、もう敬語がめんどい。

楓も何故か俺に冷たく接する。

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬといいでござるよ。」

とか言われた。

意味が分からない。

ちなみに今日の授業で頬に湿布を貼ってきた俺を見て、
「Aの女子がー（主に朝倉が）、」

「それは修羅場でついたんですか？誰なんですか？」

とか騒いだ。適当に誤魔化して逃げたのだが、後で

「私は跡が残らないようにぶったでござるが、誰に？」

とか聞かれたので説明したら、さっきの馬に蹴られて死ね発言が来た。

本格的に分からない。どうしたものか。

そんなことを考えながら部屋に戻ると、エヴァがいた。

「よおエヴァ。まだ呪いは解けないのか？」

「ああ、やっと戻ったか銀次。懐かしいな。」

俺に普通に接してくれる知り合いはお前と綾瀬さんくらいだよ。

もうおいちゃん泣きそう。

「まあいいや、で、何のようだ？」

「なにがいいのかわからんが、5年ぶりにやってきた薄情な友人に挨拶をしようと思ってな。」

「うつ…でもしかたないだろう師匠の所で修行してたんだから。」

たしか面識あったよな。

ここは穩便に済まさないとな。敵を増やさないためにも。

ってあれ？

「師匠と言つのはあの小娘のことか。」

一気に不機嫌になった。

あ…やべえ。あの二人、すげえ仲悪いんだよな。墓穴つたかあ…。

「あつ、あのさ、昨日警備の顔合わせのときに、悪の魔法使いには近付くな、って言われたんだけど、それって誰のこと？」

話を逸らすか。

「……………私だ。」

やべえよもういつキレてもおかしくねえよ！

墓穴掘って自分で入って土かけちゃったよ！しかも土固めといってね、って知り合いに頼んじやったよ！

「ぐうぐう、御免エヴァ。挨拶に来てくれたんだよな？」

「……………そうだ。ついでに新しい従者の紹介に来た。チャチャゼロは留守番だ。」

「マスターの従者の絡繰茶々丸です。宜しくお願いします。」

「あ、ああ、こちらこそよろしく。」

ロボット、いやガイノイドか。

「それで？お前は今更何をしに来た？」

何故エヴァが悪なのかがいまいち分からないが、気にしているのだろう。ただ吸血鬼だってただだったような…。――（↑そこが問題です）

「ああ、近々英雄の息子とやらがやってくるらしくね、そのサポートだよ。」

「何！？そいつの名は！？」

おおう、偉い食いついたな。

「たしか……ネギ・スプリングフィールドだったかな……？――（スプリングフィールドです。）」

「スプリングフィールド？スプリングフィールドじゃないのか？」

「んー……分かんない。」

「とことん使えないな。まあ来てから確認すればいいだろう。」

「うぐっ……。」

使えないって言われた…。

「それで、お前は何故龍宮に避けられているんだ？長瀬にも冷たくされているようだ。」

「ああ…それなんががな、【長いので省略】でな、それから【紆余曲折】だというわけだ。」

「うむ。それはお前が悪い。」

「何故!？」

「それがわかるまでお前はチェリーだろう。」

サクッ！

サクサクサクッ！

エヴァ の ことばのやいば！

こうかは ばつぐんだ！

ぎんじ は たおれた！

「ふふ、気にするな。貰い手がいなかったら私が貰ってやるぞ？」

「駄目だろう。お前には好きな人がいるんだろ？」

「………… あいつはもう死んだ。」

マジで？

「それは悪かった。」

しかし例の件、どうしようかなあ…。

「悩み事があるなら、図書館島に行ってきたらどうだ？あそこは畏
さえ抜ければ落ち着いて考えられる。」

「そうか、じゃあ行ってくるかな…。」

なんか不穏な言葉を聞いた気がするが、気のせいだろ。図書館に畏
なんてあるはずないし。

「それじゃあ私達も帰るとしよう。」

「さようなら、銀次さん。」

「おう、またなエヴァ、絡繰さん。」

彼女達が出て行ってから、戸締まりやガスの元栓締めをして、家を
出る。

さあ、図書館島ってあっちだよな？

……………。

15分後。

迷った……。

毎日やってる気がするが、気のせいだろう。

うん、ここは右だな。

.....。

30分後

迷った.....。

くっそう！交番を探すしかない！

.....。

15分後。

迷った.....。

どこだよ図書館島.....。

「あ、あの…、また迷ってます？」

救世主が現れた！

「すまない綾瀬さん…と、宮崎さん、だったかな？図書館島ってどこ？」

「図書館島だったら私達も今から行きます。ついてきて下さい。」

「すまない…助かった。」

……。

「先導してるのに道を逸れやがるなです！」

「いや、その…近道かと。」

無理やり敬語にしくてもいいよ？

「いつもそうなんですか？鬼村先生が愚痴ってました。」

まじでか……。

「すまん……。」

しばらくして。

「やっと着いた……。たった15分で着くって、俺の1時間はor
z」

「い、1時間も迷ってたんですか…？」

「バカです…。」

「くそう…どうして俺は迷うんだ…。方向音痴なのか？そうなのか？」

「自覚なかったですか…。」

「まあ、助かったよ。ありがとうな…。」

「帰る時も声かけろ、です。どうせ迷うだろうから。」

言い返せない……。

取り敢えずはここで…何しに来たんだっけ？

そうだ。マナが怒った理由だ。

まず、あいつが言っていた勘違いというのはなんなんだ…？

もしかして、アイツのことが別に好きではなかった、か？

でもそれだけでアレは怒りすぎだし…。

この件は保留だ。

あとは…楓に言われたことが…。

馬に蹴られて死ぬのは…人の恋愛をおちよくるとかする奴だよな…。

でも楓は「乙女の純情を弄ぶ」って言ってたし…。

まさかマナが好きなのは俺？

いや、ないな。自分で言うのもなんだが大して格好よくもないし。

うーん…

分からん。

そんなことを考えながら歩いていると、

「のわっ！」

矢が飛んで来た。

……………え？

まさかさつきエヴァが言ってた罠って本当にあつたの？

そついえば綾瀬さんと宮崎さん、やけに重装備だったし俺の軽装に驚いてる感じもしたけど……

マジですか？

これは考えごとなんて出来ないな。

帰ろ……。

あ、綾瀬さんだ。

「綾瀬さん。」

「ほえっ？……………ああ、鑓先生。もう帰るんですか？」

「あ、うん。しかしここ、こんなに危険な場所なんだな……。」
「知らないで来たんですか？やけに軽装だと思ったら……。」

「うん。びびった。」

「じゃあ帰りますか？私達も探検に來ただけですからのどか読んできます。」

「あ、いや、いいよ。俺はそこで待つてゐるからさ。」

ここでニツコリ笑う。

人間関係では大事だ。

これをやつて友達にならなかつた人はいない！

—（彼はこうして女を落とす。笑つとやけに格好いいのだ。自覚はないが。）

「／＼／＼、そうですか。じゃあ私はもうすこし。」

そう言つて離れていく綾瀬さん。

それからしばらくはさつきと似たようなことを考えていたが、結局なにも分からなかつた。

図書館島から戻る道の途中、

「先導してるのに道を逸れないでください！」

「いや、すまん。…あ、手繋いでくれよ。」

「（ちちちよつとのどか！どうしたらいいのあの天然ジゴロ！）」

「（ゆ、ゆえ、わわ私に聞かないでよ）」

「……イヤならいいけど？」

何コソコソ喋ってんだ？

「べべ別にいいですよ。ほら。」

ということ女子寮まで手を繋いで歩きました。

……よく考えると結構恥ずかしいな。まあいいけど。

6 日常といつのはどうにも難しい。(後書き)

ちよい無理やりすぎましたかね・・・

7 フラグ建設してみた。(前書き)

夕映の口調が安定しないorz

7 フラグ建設してみた。

ちやお。図書館島から帰った数日後の鑓 銀次だ。

なんとなんと、今日ついに英雄の息子………確かノギくん（ネギです）が来るのだ！

迎えに行くのは高畑先生だそうで、俺と鬼村先生は今学園長室で待機してる。

数日考えてもマナが怒った理由が分からない。

だから俺はこうすることにした。

取り敢えず謝ろう。

と言うことでコンタクトを計ります。確か今日ちょうどマナと桜咲さんのシフトだったから……うん。仕事終わった辺りで会いに行くか。

「おい、鑓くん、聞いておるかね？」

「あーはいもちろんですよ学園長。」

朝の野菜ジュースはうまいって話でしょ？

「本当に聞いておったのかのう……？まあいい。よろしく頼むぞい。」

何をだらうか？

まあいいや。適当にやっときゃいいつしよ。

「了解です。それじゃ失礼」学園長！どういうことですかこんなガキが先生なんて！」「……やあ神楽坂さん。近衛さん。」

「あ、ども、鑓先生。鬼村先生。」

「おはようさんー。」

流れから考えてこの子が……ナギ（ネギです）くんか。

あーなんかごちゃごちゃやってるなー……………。

「じゃあ鑓先生の所に止めればいいじゃないですか！」

…え？なに？いったい何が起きた？

「それは無理じゃ。」

助かったよ…。

「何ですか！」

面倒だからだよ。

「近々別の人が入るのでな。」
「いやソレ聞いてないよ妖怪。」

「じゃあ結局私達の所なんですか？」

「そうなるのお…まあ頼むぞい…。」

誰が来るんだよ…！

気になる気になる！

なんか俺空気だな…。

まあいいや。俺は退席しよ。

あの子俺と違って顔いいからな。騒がれるだろうな。

…あー、今日はもう寝よう。

授業ないし。

睡眠中…。

「ふあーあ。よく寝たあ…。」

今の時間は、っと…。

10:25。

……マテ。

10:25。

………Σ(。□。;)

「警備もう直ぐ終わりじゃねえかあああああああ!!!」

くそう! マナの気配は……あっちか!

面倒くせえ、一直線で行こう!

………。

……あれ?

あれは綾瀬さん? なんであんなに必死に走ってるんだ?

追いかけてる?

何から?

……妖怪から。

くっそ！

【縮地：轟】

縮地の派生である轟を使って、妖怪の目の前に移動する。

「綾瀬さん、大丈夫か？」

「……え？あ、はいです……。」

「取り敢えず行こうか。」

「え？いや、その化物は……？」

ああ、そのことね。

「大丈夫だよ。もう問題ない。」

ずばずばずばずば……！！

妖怪は全身を刻まれて還っていった。

【縮地：轟】の力。

本来なら自分の前の空間と行き先の空間を繋げることで高速移動をする縮地だが、その繋げ方を変え、繋ぎ目を音速以上の速度で振動させることでソニックブームを起こし、ダメージを与える技である。勿論振動のさせかたを工夫させ、敵にしかダメージを与えないよう

にする。

移動と攻撃を同時に出来る高等技術だ。

「あ……あの…。」

「ああ、今更だけど、敬語にしないでいいよ。一つしか変わらないし。」

「は、はあ。」

「うん、それでね。すごく端折って説明するけど、あれは本当に妖怪で、この世界には魔法っていうものがあるんだよ。以上、QED。詳しいことは別の人に聞いて。」

「え、えと、魔法を知った私はどうなるんですか？」

「記憶を消される。もしくは誰かに魔法を教わって自衛するしかない。」

「記憶を、消される…ですか。」

さすがに酷だな。この歳の少女にその決断をさせるのは。

「まあ、よく考えてから決めろ。」

…これでいいのかな？

ってかやべえ！マナが帰っちまう！

「俺は用事があるからもう行く。明日にでも聞こう。．．．あ、ちよい待ち。影分身！」

一応甲賀の忍者だ。．．．軽く抜け忍状態だが。

「よお、本体。出入りか？」

「護衛だ。女子寮まで送って行ってやってくれ」

「あつ！あの、鑓先生！」

「何だ？」

「助けてくれてありがとうございます。」

なんか照れくさいな…。

「まあ、気にするな。」

ヤバイ！時間が！

「あとまかせたぞ分身！」

間に合ってくれよ…。

どうして、どうして、どうしてこうなった。

私は忘れ物を取りに教室に戻ったただけなのに。

森を通りかかったら変な化物がいて。

「見られちまつたからには殺さんとあかんのだわ。すまんな嬢ちゃん。」

と言って追いかけてきて。

そうしていま、私は走っている。

頭の中には、

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！！！！

これだけだ。

元々体力には自信がない。じき追いつかれてしまうだろう。

そう思った時だった。

今まで聞こえていた足音が突然止まった。

振り向けば、そこには一つ年上の先生が。

何事もないように話しかけてくる先生。まさか見えていないのか？

「大丈夫だよ。もう問題ない。」

と言う。同時に、化物の体のいたところが切れた。

そして消える化物。きけば、妖怪だという。魔法使いの存在、記憶の消去。

信じたくはないが、事実なのだろう。よく考えてから決めろ、か。

「あつ！あの、鑓先生！」

「何だ？」

「助けてくれてありがとうございます。」

お礼を言う。

………何故か、顔が熱かった。

俺は縮地を使ってマナの気配のある所に向かう………のだが、突然気配が増えた。

その数、約200。

これをマナと桜咲で捌くのはキツだろう…。

だあもう！謝る前に戦闘かよ！

……ぴこーん！

閃いた。

あれを使おう。

そこにいる者達が気配を読めないギリギリまで近づき、

【縮地・隠】

音もなく鬼の集団の背後に立つ。

これも縮地の派生。縮地が空間を操る術である以上、自分の周囲だけを遠くのものに入れ替えることで気配を『消しながらも縮地を行う』術。しかし、一度移動してからは動けない。周囲が別の空間だから。

よって俺はそのまま召喚したと思える術師に、

【歩法・影】

視認が出来ないレベルまで『存在を薄くして』近寄る。

……これらの術をすべて師匠が考えたのだから、感服である。

そして首筋に手刀を叩き込み、鬼達を還す。

今日はマナに謝るのを諦めて帰ることにしよう。

……べ、別に怖くなったわけじゃないんだからねっ！

次の機会をさがすか…。

最悪だ。

警備の時間はもうじき終わりだというのにこの鬼の数はなんだ。刹那と2人じゃ捌ききれないぞ…！

援軍をまつか…。

そう思っていたのに、

ひゅひゅひゅん。

「なっ！？」

鬼は消えた。刹那の驚愕の声。

術師が気絶したか、死んだか。しかし、術師以外に気配は感じない。相当腕の立つスナイパーか、はたまた別の誰かか。

しかし麻帆良には私しかスナイパーはいない。

可能性があるのは実力が未知数である銀くらいか。

クソ、思い出すだけで腹が立つ！

女を泣かせるのは最低の男だ。

………まあ最近謝ろうとしてるみたいだから少しは考えてあげよう。

7 フラグ建設してみた。(後書き)

もうフラグが渋滞起こしそう・・・

8 再び転生者の先輩視点で。（前書き）

このキャラも銀次の毒牙にかかる予定・・・。

8 再び転生者の先輩視点で。

やほー、月崎蒼乃です。

副担任の迅君と同じ転生者やってまーす。もち能力付き。でも名前とは全く関連性のない能力だったよ。型月系も付くのか？とか期待しちゃった。

そうそう、なんか神様と喋ったときに

「彼の味方になってくれるといいがのう…。」

とか呟いてたけど、失言だったみたい。おかげで能力におまけつける変わりに絶対に誰にも言うなって言われたわ。おまけは嬉しかった。

彼って誰なんだろ。

私の勘だと迅君だと思っただけど、最近入ってきた銀次君もあやしい。多分転生者だと思うけど証拠がないのよね…。

んー。しばらく様子見ね。

しかしエヴァちゃん可愛いわぁ。今度仮契約してみようかしら。

迅君は原作にはあんまり興味ないって言ってたけど、私は介入するわ。面白そうだし。

取り敢えず図書館島での勉強会かしら。

ふふふ。
楽しみね。

8 再び転生者の先輩視点で。（後書き）

短ッ!!!

10/04 一人称変えました。

9 どうにも・・・が多い・・・(前書き)

修学旅行でハイド氏出すぞー！！！！

9 どうにも・・・が多い・・・

翌日のお話。

「……………え？」

ども。開いた口が塞がらない、鑢 銀次です。

理由？

そんなの決まってる。

「今日から広域指導員となった鑢 姫香くんじゃ。」

これだ。

「ちやお。」

「し、し、師匠！？なんでここに？」

「いや、行くて言っておいたでしょ？」

いや、言ってたけどね？確かに言ってたよ。でも本気とは思わないじゃない普通。

「というか鑢くん。ネギくんが来る日の朝伝えたじゃろ？」

……………話聞いてなかったんだよう！

「つつーか、つまり師匠は俺と相部屋ってことですか？」

「それも伝えたはずじゃ。」

oh、ジーザス！

「ええ。いいですよ。いいですとも……。」

「まあ拒否つたらあんたが昔仕事の時に名乗ってた名前バラすけどね。」

それはマズい。すでに死んだことになってる男だ。敵も多いから狙われる。

くそっ……。

またマナに謝る機会が減ったぞ。

……………授業行こう。

「今日はあれだ。運動場で自習！」

『はい！』

さあ、俺は職員室でゆっくりしてよ……。

「ネギ先生、鬼村先生、鑓先生！校内で暴力事件が！ほら、傷！」

厄介事の予感…。

「ど、どうしたんですか？」

ネギエ…。

鬼村先生も面倒くさそうだな…。通じるものがありそうだ。

だー…取り敢えず様子だけ見てみよう…。

運動場に行くと、高校生と2人Aが喧嘩をしていた。

おいおい。

「はいストップ。何があったか説明して！」

面倒だけど話くらいは聞いておこう。

「先生！【略】で、しかも【長いよ！】なんです！」

ふむ…。

「高校生側の言い分は？」

「私達は【ry】で【無茶苦茶な理由だなおい…】だけです！」

ふむ。これは両方悪いな。

「んー。両方に問題があるからなんとも言えないが…。要するに仲直りすりゃあいいんじゃない？」

「そんな適当な…。」

「だったらドッジボールで対決ですわ！」

えー…？

「……なんでさ？」（本人に自覚はありません。）

「いいわよ！」

「それじゃあハンデをあげますわ！」

お、高校生も譲歩するのk

「じゃあ私達20人对あなた達10人ね！」

えー…？

それはむしろ不利だよバカレンジャー。

「おい神楽坂…それはやめたほうが」

「ではそれで始めますわ！」

高校生、大人気なさすぎ。

まあいいけど。

「じゃあネギ先生。審判たのみますわ。」

「ちよつ、鑓先生！鬼村先生も傍観しないでください！」

「いや…。俺は見てるよ？」

鬼村先生、あなたは味方じゃないんですか？

まあいいけど。

俺も見てるかあ…。

試合は2―Aが押していた。

だってみんな動きが尋常じゃないよ？

ってオイ高校生！今はロスタイムだから攻撃なしだよ！

ダッシュで神楽坂の後ろまで行き、右足で受け止める。

「ちょーつと大人気ないんじゃないの？高校生さん。……後の説教は頼みますよ、鬼村先生。」

「……なんでさ？」

お、俺と同じこと言ってるよ。

「自分、不器用ですから。」

師匠のトコロで見た作品の台詞でこまかして逃げよう。うん。

「はあ。まあいいよ。」

それを聞いて、俺は職員室に戻る。後ろで鬼村先生が諭してるのが聞こえる。立派だな、あの人。

放課後、部屋に戻ると、師匠がいた。

「……そうだった。」

「何よ。アタシがいちゃいけないって言うの？」

いやそんなことはないが。

こう、本能的に恐怖が。

こんこん。

「ほい。」

「綾瀬です。」

「あ、入って。」

「こんにちは鑓先生……その人は誰です？」

「銀。この子誰？」

「ああ、こちら俺の師匠、鑓 姫香さん。こちらは教え子……の綾瀬
夕映さん。」

「よろしくです。」

「ん、よろしく。」

「で、昨日のことだろ？」

「……はい。」

「昨日のこと？」

「後でいいですよ師匠。で、どうすることにした？」

「……記憶を消されるっていうのは、その時の自分を殺すことになる
です。だから、魔法を習うです。」

「……本当にいいんだな？」

「はい。」

「よし。ならエヴァでも当たるか。着いてきて。」

あ、しまった…。

「エ・ヴァ？それはあの忌々しいロリババアのことかな？」

2人仲悪いんだよ…。

「ま、まあ師匠はここで待っててください。」

「あ、あの、エヴァっていうのはクラスのエヴァンジェリンさんのことですか？というか鑢先生は教えてくれないですか？」

「ああ、うん。俺は魔法あんまり使えないしね。基本は気を使った物だよ。エヴァとは古い知り合いだね。」

「あの人も関係者だったですか。」

正確には人じゃないが。

さあ行こうか。

……お土産はアイテム欄に入ってるなんかでいいよね。うん。

15分後。

迷った。

「あの、鑓先生…まさかとは思ってますけど…迷ったですか？」

「ハハハ、ナンノコトヤラ。」

「……迷ったんですね。」

…。

「すみませんでした。」

「…まあ何となくわかってたですけどね。」

…orz

電話して迎えに来て貰うか…。

t r r r r . . .

ガチャ。

「もしもし。」

この声は…絡繰さんかな？

「あ、絡繰さん…エヴァに変わってくれる？」

「鑓様でしたか。今変わります。」

敬語はキツいが…まあいいか。

「あ、様付けはなしの方向で。」

これだけは言っておこう。

「…では、鑓さん、と。」

「ん。それでよろしく。」

「ではマスターに変わります。」

「銀次か。どうした。」

「今お前の家に向かっているんだぞ」「いいか、そこを動くなよ。今迎えを送るから絶対に動くな。で、どこにいる？」………左手に郵便局があつて、右手にはセブン〇レブンがある。」

何故そんなに直ぐ反応するの？

「分かった。絶・対・に！動くなよ。」

そこまで言わなくても大丈夫だってのに…。

「ここにいろだってさ。」

「そうですか。」

しばらく待つと絡繰さんが迎えに来た。

「綾瀬さんも一緒に、ですか。」

「ああ、ちよつとな。」

「……………では、こちらに。」

着いていく。綾瀬さんに道を逸れるなどか言われたけど、大丈夫だし。

「ただいま戻りました。」

「お邪魔します。」

「お邪魔するです。」

「ああ、よく来たな銀次…と綾瀬？」

怪訝な顔してるな。説明しとくか。

「ああ。ちよつと昨日【ヒーハー！】でな。」

「それで私に魔法を教えてやってほしい、と？」

「うん。」

「代償はなんだ？」

あー、そついやエヴァってこつだったな。

やけに『悪』であろうとする。すっかり忘れてた。

「これ。」

アイテム欄からお土産に持ってきたおやつと高級ワイン。

「そんな安っぽいものでできるかぁ！」

「いや、ワインは高級だぜ？」

「そついう意味ではないわ！もっとこつ、血とかだな……」

そついやエヴァって吸血鬼だったっけ。

もう、手がかかるなあ。

「貸し一ってのは？。」

「……お前に貸しができるのは魅力的だがな。むう。貸し三でどうだ？」

ばりすぎだ。

「二だな。」

「三。」

「二だ。」

「……ちつ。いいだろう。ついてこい綾瀬夕映。」

折れてくれた。

「あ、はいです。」

別荘使うのか。……大丈夫だろうけど一応言っとこつ。

「あんまりやりすぎんなよ?」

「ああ。大丈夫だ。」

ニヤニヤしとるー!

……俺も行くか。

「これは水晶玉ですか?」

「別荘と言つてな。この中での1日は外での一時間になる便利な物だ。」

「……ええ。大丈夫です。もう驚かないです。」

「それじゃ、行くぞ……。銀次もくるのか。」

「心配だからな。」

「そうか。じゃ行くぞ。」

足下に魔法陣が浮かび上がり、気がつけば全く違う世界に来ていた。

いつ見てもすごいよな。

「これが別荘ですか…。すごいです。」

「そうだろうそうだろう。」

胸を張って威張ってる。

「（ボソッ）無いのにな。」

「あゝ あん？」

「ナンニモイッテマセンヨ？ハイ。」

超怖え。これが女か。

エヴァが綾瀬さんに初心者用の杖を渡している。

「さて。じゃあ初歩の初歩からだ。こう唱えろ。プラクテ・ビギ・ナル
アイルデスカット
火よ灯れ」

「プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ」

ぽうつ。

「火がついたです！」

「ほう、一発か。なかなか才能はあるようだな。……誰かさんと違って。」

いいなあ綾瀬さん。俺なんて半年かかったぜ？一週間で見放されたけど。友達は続けたがな！えっへん。

あ、誰かさんてまさか俺？……だよなあ。

「さて。次は自分だけの始動キーを考えろ。」

「始動キー？」

「さっきのプラクテ・ビギ・ナルって奴だ。」

「そうですね…少し考えさせてほしいです。」

「よかるう。」

5分後。

「まだか？」

「もう少しです。」

15分後。

「まだなのか？」

「もう少しです。」

20分後。

「早くしろおおお！」

「決まりました！」

「って既に銀次寝てるし！」

z
z
z
.
.
.

「……………きて……さい。起きてくださいー！」

「ぬわお！」

寝てたかあ。

「もう別荘を出るです。」

「おお。もうこんな時間か。」

「まる１日寝続けるって……。」

……さあ出よう。

「ありがとなエヴァ。また来るよ。」

「修行だからな。毎日来いよ綾瀬夕映。」

「は、はいです。」

その後は道を覚えていた綾瀬さんと一緒に寮に戻り、不機嫌だった
師匠に夕飯を作って、一緒に食って寝た。

………まだマナには謝っていない。

9 どうにも・・・が多い・・・(後書き)

台詞ばかりだよorz

10 先輩、ネタばらしですか？（前書き）

はやくマナと仲直りさせたいです。

10 先輩、ネタばらしですか？

『魔法の本？』

いや、常識で考えようYO。

ないYO。誰だYO。ネギ君だYO。

ラップはやめた。

考えがあるのかなネギ君？……いや、学園長。

俺巻き込んだらキレちゃうよ？

というかさ。なんで俺？—Aのバカレンジャー（と月崎）と一緒にいるの？副担任は鬼村先生だよね？というか担任と副担任が二人とも授業サボっていいの？

「ね？鬼村先生。」

「何がだ？」

「いや、俺なんでここにいますか？」

「んー…俺が連れてきたからかな。」

「ああ、いい笑顔です先生。はあ……なんだろうこの熱い気持ち……これが——」

「え、ちょ、鑓くん？」

「——殺意なんだ（はあと）」

「ちょ、その握りしめた拳を振りかぶるのは…ア——ッ！！」

15分後。

「あ、あの、鑓先生。これはなんですか？」

ん？これはね。

「だったもの鬼村先生だよ。」

『（い、生きてるのか…？）』

「……し、死んだかと思ったよ。」

「あ、よかった、生きてたんだ。」

「死ねばよかったのに、みたいな雰囲気でてるよ鑓くん！？」

「気のせいですよ。」

閑話休題

「と、とにかく、図書館島に向かいましょう!」

「行つてらっしゃーい。」

「いや、君も来るんだよ?」

「……………は?」

いや、ちょっと皆さん? 俺はいつのまに簀巻きにされたの? そして何故引きずられているのでせうか?

いやあああああ!!!

しばらく後。

「ここが図書館島ですか!。おつきいですねー!」

だよね。俺も始めてみた時は驚いたよ。(簀巻きのまま現実逃避)

「それじゃ、行くですよ。」

スタスタ…ガンツ、ゴンツ。

「痛い痛い痛い！自分で歩くから！縄ほどいて！」

「……わかったよ。」

助かったよ鬼村先生。

びゅっ！

「ぬおう！」

飛んできた矢をキャッチ。そっぴゃあここ罠あるんだよなあ…。

「というか楓よ。お前俺のこと逃がしてくれない？」

「いやでござる。」

「orz」

どうせ面白いからなんだろ！そうなんだろ！

くそ、楓め！覚えてろよ！

あーもう罠つつとおしいな。

しかしマナにはいつ謝ろうか…。

というか何で怒ってるかもいまいちわかんないんだよな。

俺のことが好きなのかもしれないとは最近よく思っただが、恐らく違っただろっなあ…。

「って何でツイスターゲームやってんのおおお!？」

「今更!？」

いや、無意識だったからな…（無意識で畏を突破した。）

「次じゃ。『DISH』」

「えっとね…『お』」

「『お』」

「『お』」

……『る』

「…………え?」

ズズウン…

ドオオオン!…!!

ガラガラガラ…

「うわあああん!アスナのおさるー!」

俺は近くにいた綾瀬を引き寄せる。

「ちょっと失敬。楓！お前は……大丈夫そうだな。」

「あいあい。」

落下中 Now Falling . . .

しゅたっ！

ぼちゃん！

下が水だったよ…。

ありやりや、みんなびしょ濡れだよ。

「綾瀬さん、大丈夫？」

はじっこの方に落下した我々は小声で会話。

「あ、はい。ところでですね…その、夕映と呼んでほしい、です。」

「へ？いや、別にいいけども、大丈夫なの？」

「なにがです？」

「いや、異性にファーストネームで呼ばれるのが。」

「……大丈夫です。」

そうか。

「じゃよろしく、夕映。」

「はい、銀次先生。」

「はい！そっちでいちゃついてないでこっちにおいでー！」
ブッ……！！

「イちゃっ！？」

いや、思わず噴いちゃったよ。

佐々木さん……。

「あ、あの、じゃあ取り敢えず勉強しませんか？」

ネギ君提案。

……勉強中。

俺は本を読んでる。

「なあ鑪先生。」

鬼村先生？

「なんです鬼村先生？」

「いや、気になっていることがあってね。」

「？はあ。」

「君は転生って信じるかい？」

……………え？

「へ？…はあ、まあ…。」

「俺はね、転生者なんだよ。」

『先輩』ってのはこの人か。

「はあ。」

「君もそうじゃないのかい？」

「まあ、そうですね。」

「やっぱりか…。ふむ、君は生前どんな人物だったんだい？」

「…それがですね、神様とやらに記憶を一部消されたんですよ。不思議なことに一部の小説の知識とか、友人が何人くらいいたか、くらいは思い出せるんですけどね、その友人の名前とか、自分の名前

とかは分からないんですよ。」

「…そう、か。すまないな。」

「いや、気にしないでください。」

「まあ、仲良くやろうや。」

「はい。」

「あ、月崎蒼乃も転生者だぞ?」

「そうだったんですか…。」

「…もういいや。不貞寝しよ。」

なんかいつも寝てる気がするのは気のせいだ。間違いない。

睡眠中 Now Sleeping….

「まき絵さんを離してください！」

もうやだ。

また石像ですか？

なんで起きたら佐々木さんが捕まってるの？

そして何故鬼村先生は今にも飛び出しそうなのを堪えているの？

何故月崎さんはニヤニヤしてるの？

「フオフオフオ。」

……ぷっちん。

「俺の安眠を妨害した代償はでかいぞ？」

石像に突進。同時に出ていた古^クさんとそれぞれ片足ずつ蹴り、膝力ツクン。

「フオ？」

その隙に楓が佐々木さんをキャッチ。ついでに佐々木さんがリボンで本をキャッチ。鬼村先生が石像のドテツ腹にヤクザキックをかまして体制を崩す。

「こつちです！」

綾瀬さ……夕映が滝の後ろにある出口に向かい、それにみんなが続く。

…ネギ君魔法ないとダメダメだね。

『1F直通』

と書いてあるいかにも胡散臭いエレベーターに乗り込むが、

ぶーっ！

重量オーバー。

「服を脱ぐのよ！」

いやいやいやいや！

鬼村先生とネギ君と三人で目を塞ぐ。

石像来てるよ！

さりげなく脱いだ服を取っておき、

「こんな本！」

ネギ君が出ようとした所で神楽坂さんが本を石像に投げつける。

同時に上昇するエレベーター！

1Fに到着し、

「ほれ、服がないと困るだろ？」

鬼村先生と一緒に持っていた服を渡す。

「助かったアルな…。」

月崎さんは終始ニヤニヤしてたな。

結局テストはバカレンジャーの健闘により学年一位。ネギ君の立場が安定したのであった。

ちなみにその間俺は学園長とO H A N A S H I してた。

翌日、ジョーも真っ青なくらいに燃え尽きた学園長が発見されたとかされてないとか。

オマケ。

「おい！気合いが足りないぞ綾瀬！もっとこっつ、魔力を振り絞れ！」

「そ、そんなこといわれてもですね…」

「口答えしない！」

「はいっ！」

「マスター、やり過ぎには気を付けてください。」

「そうだぞエヴァ！気を付けてやれ！」

「うふふ、面白いわね。」

今日も平和一（？）なエヴァと仲間達であった。

10 先輩、ネタばらしですか？（後書き）

最後のせりふは月崎さんですよ？

11 後半の手抜きが酷い。(前書き)

ちよつと設定とか名前が他の方の作品とかぶりすぎていることが判明。たぶん近いうちに能力とか生まれとか変えることになるかもです。

あと、夕映の始動キーって原作ででてましたっけ？感想のところに書いてくれると助かります。

11 後半の手抜きが酷い。

どうも。鑢 銀次でヤンス。

「おらおら！ちゃんと鍛錬やってたのか銀！」

師匠と模擬戦中です。

「師匠さ、付けてる、ッ！おもりいつもより軽いので、しょッ！」

基本的に模擬戦では使用していい技は殺傷能力の低い技のみ。

一撃で死にかなないのは使わない。

分身を作って上下左右から蹴りを放つも、左右の足を取り、体を回転させつつ上下の二人に当てる。

本体の俺はその隙に蹴るが、間一髪のところでもマトリックスされ、避けられる。

「今のはよかった、なッ！」

鋭すぎる回し蹴りを受け流し——受け流した腕が軽く裂けた——
——続いて繰り出されるローキックを飛び退いてかわす。

そのまま一瞬停止してから飛び出し、双掌を突き出す。

…胸に当たりそうだけど避けられる。いろんな意味で助かった。

バク転と蹴りを同時に行う、所謂サマーソルトキックを当てようと
するが、体を横向きにされ、当たらない。

そのまま着地、正拳を突き出す。

しかし掴まれて投げられる。受け身を取って立ち上がり、裏拳を放
つ。

「引き分け、ですか…。」

「そうね。ちなみにおもりはいつもより少しだけ軽くしてる。進歩
したわね。」

いよしっ！

今の体勢を説明しよう。

俺の裏拳は師匠の腹の数センチ手前。師匠の正拳は俺の後頭部の数
センチ手前。体重の乗せ方から考えると俺が押し負ける。

ちなみに師匠。広域指導員をやっているため、『麻帆良最凶の女』
『棘の多すぎる薔薇』とかの二つ名がついた。

最近は楓の修行にもちよくちよく顔を出す。中々強くなっているみ
たいじゃないか。

それから、最近、満月の夜には桜通りで吸血鬼が出るらしい、とか
いう噂が立っている。佐々木さんが桜通りで寝ていたとかなんとか。

エヴァだな。うん。

本人に確認を取ると、

「ふつ、そうだが、止めるのか？」

とか言われた。

「いや？確認だよ。」

って返しておいた。

模擬戦の後、俺は学校に行って適当に授業をする。

この適当具合が生徒に受けがいらしい。（鬼村先生談）

未だにマナには避けられている。

後は夕映がかなり強くなった。

魔力自体は大したことはないが、術が強い。エヴァの闇の魔法も習得を始めたとか。最近は体力作りを進めてるらしい。

閑話休題

今俺は桜通りに居ます。

今日は満月。

見学しようと思った。

…お、宮崎さんかな？

なんか歌ってる。

黒尽くめの誰か………エヴァか。がなんか言ってる。

「…番……崎の……かな……のを……く。」

聞こえねーよ。

ちょっと近付いてみよ。

「僕の生徒に何するんですか！」

ネギ君登場。

戦闘中。

あ、エヴァが逃げた。

ネギ君も行っただな。ついてこ。

ってぶッ！

下着姿はキツいよ！そして何故平然としてるの！？

絡繰さんにいじられてるネギ君。

「うちの居候に何してんのよー！！！！」

「ふぼっ！」

ドロップキックですよ…。

神楽坂さんやるな。

あ、エヴァが逃げた。

……………。

「誰？」

「あら、バレちゃった。」

「なんだ、月崎さんか。」

後ろ取られちゃったよ。

「見学は楽しかった？」

「うーん。エヴァの下着姿はちょっと噴いたな。」

「ロリコ「ちがぁあう!!」……そう。」

失敬な!

「と、ところで月崎さんも転生者なんだって?」

「あら、やっぱり鑓先生もそうなんだ。」

「記憶はほぼ消えたけどね。」

「へえ。…まあ能力の詮索はしないわ。」

「そりゃ助かるよ。」

「（彼っていうのは鑓先生なのかしら…）」

「何か言った?」

「いつ、いえ、何も?」

う? 気になるな。

まあいいや。

「ほれ、もう遅いから生徒は帰った帰った。」

「じゃあ今日は帰るわ。お休みなさい。」

「おう、お休み。」

俺も帰って寝るか。

週明け。

ネギ君、神楽坂さんに抱えられて登校。

「は、離してくださいい！」

恥ずかしいらしい。そして行きたくないらしい。

まあエヴァはどうせサボってるだろうけどね。

そういえば夕映は昨日エヴァと一緒にじゃなかったのな。ま、従者じゃないからか。

屋上行こ。

「エヴァちゃん、いるかーってのわぁ！」

跳び蹴りきた。

「エヴァちゃんって呼ぶなあ！」

「悪い悪い。暇なんだよな。…お、月崎さんも居るのか。」

「どうもー。」

「ここで寝てっついていい？」

「……お前仕事はいいのか？」

今日はたしか、2―Fだったかな？

「午後だからな。」

「じゃあ好きにしろ。」

お休みー。

銀次が寝付いた後。

「ねえエヴァちん。」

「エヴァちんゆーな！お前まで銀次の悪影響を……」

ガミガミ怒鳴るエヴァちん「お前もか！^{作者}」。

「まあまあ、それでエヴァちんと蘆先生の関係は？」

「だからエヴァちんと呼ぶなと……それで、銀次との関係か？……友人だな。」

「へえ。どうやって知り合ったの？」

「たしか、7年程前にな、一度ここに潜入して来たのだ。見事な隠れ方でな、私が向かっても見つけれなかったんだ。」

後ろを取られて『あちよー』とかふざけたことを抜かす。

勝負しようとする

『警備がどんなものか見にきたただけだからな。』

とか抜かしてぬらりくらりと逃げる。

そんなのが何回も続くうちに友人のような関係になった。」

「なんだか面白いわね。」

「最初は腹が立ったがな。」

「あちよー！……！」

「のげふっ！」

は、腹が……！

朝飯が噴射される…！

「だ、だれだよ！」

「銀次先生。起きやがれです。」

「夕映か…。どうしたんだ？」

「今昼休みなのでエヴァさんに起こしに行けと言われました。」

ああ授業ね。

はいはい、行きますよー。

翌日。

こゝ、これがキングクリムゾンか…！恐ろしや。

電話休憩
電波受信完了

エヴァが風邪で寝込んだそうな。まあ見舞いには行かなくていいだろ。そういや明日は大停電だなあ。

「でさ、なんで楓はここにいるの？」

ここは俺の自室（女子寮の管理人室）なのだけでも。

「銀くんはいつになったら真名殿に謝るでござるか？」

それかよ。

「ぐむ。タイミングが合わないんだよ。」

「というか原因は分かったのでござるか？」

分からねえよ。

「……多少考えたけど『マナは俺が好きなんじゃないか』とかいう見当違いなことばかりだ。」

「（そこまで気付いて分からないとは…）ダメダメでござるなあ。」

ほっとけや。

自覚あるから一番キツイ。（かつこ内部の声は聞こえていません。）

「お前は分かるのか？」

「うむ、当たり前でござる。」

マジか。これで俺は仲直りできる！

「教えてくれ。」

「駄目でござる。」

ガラガラガラ。

俺の夢が音を立てて崩れていった。

「一応聞くが、何故に？」

「これは自分で考えるべきことでござるからな。」

そうですか。

まあ楓は昔から意味のない話はしなかったからな。

「そろそろ停電でござるからな。拙者はお暇させてもらつてござる。」

「

嵐は去った、みたいな？

ぷつんっ。

そんなことを考えていたら、電気が切れた。

タイミングぴったりだな楓よ。

同時に大きくなる気配。

これは……エヴァだな。

ちょっと向かってみるか。

戸締まりをして、気配のする方向に跳ぶ。

あ、移動してるな。

うわ、結界の外出ちゃったよ。

ネギ君と勝負するのか！。

神楽坂さんも一緒か。

あ。

罾かけたのか。

でもどうせかけるなら落とす穴に大蒜とか敷き詰めればいいのにな。

派手にやってるなあ…。

武装解除か同士のぶつかり合いか。押されてるなネギ君。

「ハ……ハ…ハクシヨン！！」

えー？

くしゃみで武装解除されたエヴァ。

「マスター！ いけません！ 予定より7分以上あるのに…！」

電気が着いていく街。

「マズい…ッ！」

縮地を使つて落ち続けるエヴァを支える。

「鑓先生！掴まってください！」

杖に跨つたネギ君。

俺は平気なんだが…まあいいや。

差し出された手を掴み、橋に戻る。

「何故助けた？」

「確かにエヴァンジェリンさんは吸血鬼です。けど、僕の生徒です！」

俺は今のウチに逃げます。

ぐいつ。

「ぐえっ。」

「どこに行く銀次。」

「帰りますわ。」

「何故ここにいる。」

「見学に……ってしまった！」

そんなこと言ったら

「何故加勢しない！」

やっぱり。

「いやだってどっちの敵でもないし。」

「……爺の仕事か。」

「そういうことだ。まあ危ないみたいだから助けたけどな。」
物わかりがいいと助かる。

「分かった。」

「おう、ありがと」

「ただし！いくつか言うことを聞いて貰う。」

えー。

でもまあ、友達なのに加勢しなかったからなあ…。

「俺に出来る範囲だぞ。」

「ああ。」

本日の成果

エヴァに借り（？）が出来ました。

成果じゃないとかいう突っ込みはなしの方向で

12 相変わらずすぎる駄文。(前書き)

修学旅行でどう銀次を絡ませるか考え中・・・

12 相変わらずすぎる駄文。

たまにおなじみ、鬼村 迅だ。

今回は作者が出番をやるうとかいうことで書いたらしいな。

閑話休題
電波受信完了

原作にもあつた桜通りの吸血鬼事件だ。

「3年A組！ネギ先生ー！」

（バカばかりだな…。）

→長谷川千雨

（アホばっかです…。）

→綾瀬夕映

ネギくん、エヴァンジェリンの視線に気付いたのか。なかなかやるじゃあないか。

「え、えっと、今日は身体測定があるので、みなさん脱いでくださ

い！」

「きゃー！ネギ君のえっちー！」

アホだな。

そっぴゃあ佐々木が襲われたんだっけ？

くそっ、助けておいた方が良かったかな（フラグ的な意味で）

鬼村は佐々木と綾瀬を落としたいと考えております。綾瀬は無理だろうけどね。

外に出て着替え終わるのを待つ。

「ネギ先生ー！鬼村先生ー！まき絵が、まき絵があ！」

きたか。

『まき絵がどうしたって？』

ぶはっ！

下着で出て来ないでくれ…。

と、取り敢えず保健室に行こうか。

みんな心配してるみたいだな。……ネギくんは魔力の残滓に気付いたのかな？

ちよつと動きを見てみようか。

あ、今日は宮崎さんが襲われるんだっけ？

まあ、蒼乃がいるから問題ないっしょ。

週明け。

今日のネギくんは暗い。授業そっちのけで……って、

「和泉さんは…僕がパートナーって嫌ですか…？」

セクハラです。

あーあ。盛り上がっちゃったよ。

そんなこんなで放課後。

茶々丸を尾行するネギくん達を尾行する俺、という形。

「ちよつといいかしら？」

あ、店員さん。尾行1人追加で。

「あなたは確か……鑢先生の師匠の…鑢さんでしたっけ？」

「ええ。ちよつとご一緒するわ。」

原作にはいないキャラクター……転生者か？

「つかぬことをお聞きするが…転生って信じるか？」

「あら、やっぱり貴方も？」

やっぱりか。

「鑓先生からは何も聞いていなかったんだがな。」

「だって話してないもの。」

……マジで？

「なんのために？」

「なんか私を転生させた神様の意向でね。私は精神的な抑止力がどうとか、って。なんだか秘密があるみたいね、銀の奴。」

精神的な抑止力？

…体に恐怖をしみこませる、とかか？

怖ッ！

っと！ネギくんが魔法の矢を放った。

原作では確か当てないはずだが…イレギュラーが多いからどうなる

か分からん。

念のためだ。瞬身の術で茶々丸の前に行き、

【火遁・豪火球の術】！！

全てを纏めて相殺する。

確かカモとかいうオコジヨ淫獣の差し金だったな。

「なっ！鬼村先生！？」

「やいやい！アンタ何しやがる！」

「鬼村先生、エヴァンジェリンさんの仲間だったんですか！？」

一斉に問い詰めてくる。

「違う。別に彼女の仲間じゃあない。だがなネギくん、キミは分か
っていない。茶々丸はキミにとってなんだ？」

「えっ？」

「敵か？生徒か？」

「……………生徒です。」

「なら、自分の生徒に攻撃することの意味は分かっているか？」

ここで、アスナが口を開く。

「ちょ、ちょっと！ネギはまだ子供なんだから…」

「そうだぜ！」

うるさい淫獣。

「アスナ。キミもだ。若いものの間違いを正すのは年長者の役目。それを忘れるなよ。」

「うつ…。」

「まあ、ネギくんもアスナも。以後、絶対にこういうことをしないこと。OK？」

「は、はい。わかりました！」

うん。いい目になったな。

「それだけだ。淫獣の躰はしっかりしとけよ？」

「誰が淫獣だってんだあ！」

お前だよ。

どうせ深夜アスナや木乃香の下着で〇〇〇を〇〇〇で〇〇〇〇なんだからこの変態。

「今すごく嫌な予感がしたわ…。」

アスナが肩を震わす。

素晴らしい勘だ。

あれじゃね？某あさりマフィアのボスが持つという例のブツ。

超〇感！

…あ、ごめを。調子に乗りました。

ちなみにちなみに、俺の能力が気になるだろうから教えよう。
え？気にならないって？聞こえないなあ。

説明しよう！

俺の神様との会話を抜粋する！（説明じゃねえ！）

「どうも、神様です。」

「ふーん……1、1、9、と。あ、もしも」

バツ！

「もしもし？ほんくら盆倉さんですか？」

『確かに盆倉ですが、あなたは…？』

「本当に盆倉だったよ！失礼しました。」

ぶちっ。

「電話切るなよ！…まあいいや。あんた何？」

「だから神様です。君死んだっしょ？」

「そっぴやそーだね。あ、まさかのテンプレ？」

「似たようなもん。能力についてはこっから一枚引いて。しかし君順応早いな。」

「ん、了解。順応早いのはまあそういう性格だからじゃない？……えっと、カードは『ナルト』の忍術、白眼のおまけ付き。」

「じゃあネギまへー。」

ばっ！

「の、ぬわあああああ！！！！」

で気づいたら赤ん坊。

みたいな？

赤ん坊の頃の羞恥プレイはみんな体験済み。今まで書かれていなか

ったのは皆さん記憶から抹消したいかららしい。

と、茶々丸に話しかけられる。

「鬼村先生。一緒に来てもらえますか？」

「え？いや、なん」

「来てもらえますか？」

「……………はい。」

後ろに修羅が見えた気がする。

しかし立派なログハウスだなあ…！

「お邪魔します。」

「ああ、よく来たな。今日は茶々丸を助けてくれたこと、感謝する。」

…正面切って言われると照れるな…。

「まあ、別に茶々丸を助けたくてやったわけじゃない。ネギくんへの指導のためだ。」

「ツンデレ乙」

「うるせえええー!!」

本来いじられキャラであるエヴァにいじられるとは…

迅…恐ろしい子……!

閑話休題。

適当に茶を飲んでから帰り、その日はもう寝た。

翌日。

エヴァンジェリンが風邪をひいたらしい。

見舞いに行くか。

「「あ。」」

蒼乃にバツタリ会った。

「お前も見舞いか？」

「ええ。」

ちなみに、蒼乃の貰った能力は

【悪魔の実・ゴムゴムの実】

である。

結構強い。

・・・いままで溜めてたのにあっさり過ぎ？作者にでも言ってくれ。

「お邪魔します。」

「ども。」

「こんにちは、鬼村先生、月崎さん。」

茶々丸さんか。

「今はネギ先生が来ています。看病なさっているので御安心下さい。」

「そっかー。」

「（なあ蒼乃。今日ってネギが夢覗く日だよな？）」

「（そういえばそうね。）」

じゃあ早めに帰るとするか。

大停電の時、俺は寝ていた。

大体原作通りに進んだようだった。

それが、吸血鬼事件の間の俺の行動である。

12 相変わらずすぎる駄文。(後書き)

エヴァをヒロインにするかどうか悩むどころ。

13 今日のテーマは「釈然としない」だッ!! (前書き)

そろそろ人物紹介とかやろうかな。

13 今日のテーマは「釈然としない」だッ！！

ぐーてんたーく。

たしか挨拶だった筈。

だよね？

間違つてるとかないよね？

ゲフンゲフン。

仕切り直してこんにちは。 鑓 銀次です。

今は自宅ですらしてます。

そうそう、実はいまだに誰にも夕映が魔法関係者だってバレてないのだよ！

そして強いのだよ！

エヴァが

「中々筋がいいな。もうぼーやと同じ位には強いんじゃないか？」

とか言ってた。

たまに顔を出すんだが、師匠の目をくぐり抜けるのが大変だ。純粋な体術で師匠を超えるのははたして可能なのだろうか？

噂をすれば影。師匠が話しかけてくる。

「銀一、楽しみね！」

何が？

とは聞かない。

「そうですね」

流す。

今日は何故か師匠の機嫌がいい。いやな予感。

釈然としねえ。

t r r r r r

お、電話か。

がちや。

「もしもし、鑓です。」

『おお、鑓君かの。ワシじゃ。ワシ。』

「はあ…和紙さんですか？」

くだらないことを言ってみる。たまにはこついつのもありかもしれない。

いや、違うな。これは師匠の機嫌がいいときにろくなことがなかったから、ちよつとした八つ当たりに過ぎない。

『……学園長じゃ。』

「ああ、学園長。何かご用ですか？」

用がなければ電話なんかしないしね。

『それがの。近々修学旅行じゃろ？それに着いて行ってほしくてな。君と、鏖君にも来て貰おうと思つてな。』

「……自分はいいですけど。師匠に聞いてみます。」

受話器を離し、師匠を呼ぶ。

「何？」

「いえ。修学旅行について来て欲しい、という電話が学園長からかかってきて……」

「行くわ。」

即答。いやな予感メーターが振り切れた。

「……師匠も行くそうです。」

『わかったわい。詳しい日程等は後々送るぞい。』

「了解です。あ、なんのために行くんですか？」

『ネギ君の補助じゃな。あとは木乃香の護衛じゃ。』

「……了解です。」

釈然としないものの、修学旅行に行くことになりました。

本当釈然としねえ。

まあ修学旅行までまだ暫くあるからな。適当に準備しておくか。

L e t ' s ショッピング！

30分後。

迷った。

街どこだよ？

自分が方向音痴だってこと？そんなの忘れてたに決まってるじゃないか。

「あ、鑓先生やゝ。どないしたん？」

「近衛さんと神楽坂さん、助かった！街に買い物に行きたいんだが、迷った。」

「あ、それなら私達も行くから、一緒に行く？」

「うちも賛成やゝ。あと、ウチのことは木乃香でええよー。」

「私もアスナでいいわ。」

「すまん木乃香にアスナ。助かった。」

横に並んで着いて行く。

「勝手に道を逸れるなあ！」

「すまん。ぼけつとしてた。」

「ふふ、鑓先生はおもいなー。」

あ、電車に乗ればよかったのか。

自分のアホさ加減に呆れる。

駅にも辿り着けないことには気づかない。

暫く後。

『次はー、原宿、原宿。』

「やっと着いたわ。」

「全く。騒いでるから疲れるんだぞ？」

「あんたがアホだからでしょうがぁ！」

すばこーん！

「あだっ！」

たたかれた。

痛い。

「そんなことより、だ。ありがとな、ここまで連れてきてくれて。」

「へ？一緒に回るんじゃないの？」

「そっやえー。」

「いや、でも買う物別々だし…。」

「まあいいじゃない。別に。」

「鑓先生の私服も気になるしなー。」

……ま、いいか。

「じゃあまずはお前らの買い物からだな。」

こうして買い物についていくことになった俺。

何回か2人が迷子に——2人は俺がはぐれたと言っているが——
——なったが、無事に買い物を終えた。

「いやあ、買った買った。」

「次は鑓先生の服やえ。」

「そうだな。たのむ。」

……。

「姉ちゃん達俺達と遊ぼうぜ。」

「ちよつ、やめてください。」

なんですか？

現在状況の説明、前方で大河内さん、明石さん、和泉さんがナンパされている。

「ちょっとあんた達、嫌がってるじゃない。」

アスナさん突撃。

「あ？んだよ……ってか姉ちゃんも可愛いな。こっち来いよ。」

はあ。

深い溜め息をついてからナンパ男達の前に行く。

「こいつら俺のツレだ。すまん。」

「え？いや、あの、」

少々強引に4人の手を引き、木乃香に渡す。

「おうガキ。お前じゃこの姉ちゃん達には釣り合わねえな。渡して貰おうか。」

「嫌がってんだろ？考えようぜ。」

これだからアホは困る、とわざとらしく溜め息。

ぷち。

あ、キレたな。

「こん、のガキイイイ!!」

最初にナンパ男Aが殴りかかってくるが、ひよい、と避ける。

すぐにB、Cが飛びかかってくるが、全て避ける。

3人が同時に殴りかかってくるときにしゃがんで足を突き出す。

「くぐえっ！」「」

無様にすつころぶ。そこですかさず首筋に手刀。警察に連絡してから5人のところに行く。

「よし、行こうか。」

「ほえー、すごいんやな鑓先生。」

師匠との模擬戦と比べるとねー。

「あ、あの、助かりました。」

大河内さん達がお礼を言ってくる。

「なに、気にしないでいいよ。」

「なあなあ、鑓先生達はなにしているところなん？」

和泉さんが問いかけてくる。

よし、ここはあれだな。

「デーっ」「うふふ、先生の私服を買いに来ただけやえっ」……」

ぐふっ。

木乃香さん。

「だからデー「方向音痴だからねー。極度の。」………いいさ。どうせ今世でも彼女いないし。一生チェリーなんだよ俺は……。」

「迷ってたんよー。ダメやよな。」

やめて！俺のライフはもうゼロよ！

「ちょ、ちよつと。先生が地面にめり込んでる。」

助かったよ大河内さん。君がいなかったら俺は……ガクガクブルブル。

「ところで、それあたしらも行っっていいかにやー？」

明石さんが聞いてくる。

「先生？ええよな？」

「へ？…あ、いや、別に構わないが。」

パーティメンバーが増えた！

衣服店に到着。

「まずは自分の気に入ったの探してきて。」

……。これだ。

試着。

現在の装備。

Tシャツ黒、右下に髑髏のプリント

ダメージジーンズ藍、というかほぼ黒。

コンコースのスニーカー黒

「意外と似合うけど、なんで黒ずくめ？」

「お洒落するとイケメンやなー。」

次。

タンクトップ黒。

シャツ薄めの桜色。

半ズボン藍。

ビーサン。

「中々、似合ってますね。」

「ってかき、こうして見ると女顔だよねー。」

「あ、ほんまや。」

「女装させない？」

「いやいやいや！何を、…って盛り上がるな！え？木乃香さん、その化粧品は…アスナなんで俺のことホールドしてんの！？木乃香、やめ…大河内さん助け…………アツ——！！！」

ポク、ポク、ポク、チーン。

しばらくおまちください。

「すごっつ、ちよつと先生超綺麗！」

「やって正解やったなー♪」

「ほんまやほんまや。」

「ちよつと人気なくしそう…。」

「ま、まあゆーな。あんたも可愛いよ。…………ってちよつと先生！？」

「ん？どしたんアキラ…うわ！」

「先生やめて！焦点の定まらない目で血涙流しながらあーうー唸らないで！グロいから！すぐグロいから！その格好だとさらに！」

「あ！なんか言ってる。なに？お婿？お婿がなに？行けない？お婿に行けない？」

閑話休題。

ようやく落ち着いた俺。いやな予感の正体はあれだったのだろうか。

Tシャツを幾つか、ジーンズを2つ、その他諸々を買って帰路につく。

6人でたわいもない話を続けながら歩く。

まあ、だいたいが修学旅行についてだが。

「あ。」

寮の前でマナとばったり会った。

きゅぴーん。

これはチャンスだ。

「俺はちょっとマナと話があるから先に言っておくか？」

全員が首肯。

寮に入ったのを確認してからマナに声をかける。

「ちょっと来てくれ。」

無言でついてくる。

そのまま俺たちは人気のないところに行く。

アダルトな想像したやつ出て来い。O H A N A S H I するから。

「なあマナ。その、さ、俺は…」

「…別に無理に謝る必要はないだろう。」

「?…なにを言ってる——」

「私がいなくても一緒にいる女はいるじゃないか。」

そう言つと踵を返して去っていくマナ。

「え?…あ、ちょ、おい!」

声をかけるも無反応。肩をいからせて視界から消えた。いやな予感、本命はこっちか・・・！

「これは……………拗ねてるのか？」

後に残されたのは呟く俺。

本当に、釈然としない。

13 今日のテーマは「釈然としない」だッ!!（後書き）

駄文、駄文、駄文!!!

酷すぎる……!!

あ、そうそう、エヴァをヒロインにするかどうか多数決をとりたいです。感想のところにも書き込んでくれると助かります。締め切りは・・・そうだな。9/3の12時で。締め切りまでの間にも執筆は続けると思います。

ではではさよならまた後日。

14 人物紹介。主人公以外は手抜きです。（前書き）

実は主人公以外のキャラのイメージがまだ出来上がっていないからです。

14 人物紹介。主人公以外は手抜きです。

やあやあ、鑢 銀次だ。

今日は師匠ではない作者の『鑢』にキャラクター紹介をしてもらおうと思う。

鑢です。

今回は本編に関係ありません。
今後のネタバレも含まれますので、読みたくなければこの話(?)はスルーしてください。

ではオリ主、オリキャラの紹介をば。

名前：鑢 銀次

年齢：15歳

身長：170cm

体重：58kg

誕生日：4月2日

趣味：人間観察

特技：声帯模写（実際にはただの能力の応用）

顔：まあまあイケメソ。微少年。髪は耳を覆うくらいの黒。笑顔が似合う。

性格：適当な男のようでその実中々のしっかり者。自らが友人と認めた者とは仲良くあろうとする。面倒なことは嫌いだが、必要であれば躊躇わない。恋愛に関しては中々の鈍感だが、最近は少し改善が見られる。天然ジゴロだが。

戦闘技術：鏖流拳術、蹴術を主体とした肉弾戦闘を得意とするが、最終的に強いのは武器を使った方。だが、戦い方に癖があるため、殺してはいけない場合には使用できない。

武器は気の物質化で投影（姫香命名）した物を使い、相手によって武器を変える。どれをとっても殺すだけならば一流以上。

愛用するのは姫香がデザインした武器『天鎖斬月』。

使用することで気の流し方の効率を良くし、身体能力を上げる仮面（姫香デザイン。白い骸骨に2本の黒いライン。普通に一護の虚化）も使用。

体表で気を物質化させ、防御に使うことも可能（これまた姫香考案。鋼の錬金術師の強欲^{グリード}）。

影に紛れて気を物質化させ、攻撃することも（またまた姫香考案。
フライド
今度は傲慢）。

アラガミ、ハンニバルを呼び出し融合することも可能だが、カコン
トロールが難しく、集団を『ぷちっ』と潰すとき位しか使わない。

翼がある。普段は体内に収められている。出そうとすると、質量保
存の法則を無視して生えるが、皮膚を突き破るため結構痛い。色は
漆黒。蝙蝠の翼の膜が厚めのタイプをイメージしてくれば問題な
い。背中を突き破ったときの血が少々こびりつき、黒い地に赤い模
様が着いたように見える。このさい瞳が真っ赤に染まり、瞳孔が縦
に裂ける。

気を指先や口に大量に溜めてから放出する『虚閃^{セロ}』（姫（以下略）
を稀に使う。『虚弾^{バラ}』は使い勝手がよいため使用頻度が若干高い。

気の物質化を大量に行うことで擬似的な『王の財宝^{ゲートオブピロン}』の使用も可能。

忍法骨肉細工による変装、暗器の体内収納による手裏剣砲などもあ
るが、滅多に使わない。

アイテム欄に収納されているのは日常生活品ばかり。

魔法の始動キーは秘密。自分の持ちうる数少ないネタの一つ
であるため。というかまだ考えていない。

名前：鏝 姫香

年齢：18歳

身長：158cm

体重：（血痕が飛び散っています）

スリーサイズ：（以下同文）

誕生日：8月31日（や（8）のしり（最後）だから。）

趣味：鍛錬、映画鑑賞

特技：動物を手懐けること

顔：超のつく美人。黒髪に緑がかった黒目。

性格：適当。銀次に惚れている。

戦闘技術：鏝流拳術、蹴術を使うが、大元は前世での記憶にある技術をアレンジした。

武器も使えるが、無手のほうが強い。

転生時の特典は不明。よって未知数の強さである。

数々の武器や技を銀次に教える。前世の記憶を多用するが。

名前：鬼村 迅

年齢：19歳

身長：178cm

体重：63kg

誕生日：12月8日

趣味：瞑想

特技：穩行

顔：イケメソ。人気が高い。

性格：律儀で真面目、堅物。だがなんだかんだ言って甘い部分もある。

戦闘技術：NARUTO世界の忍術、体術と白眼を使う。他にもあるが今はまだ分からない。

転生者の中では腕っ節が一番弱い、差は大してない。

また、頭が良く回り、正論を武器に論破される人を見ることが
しばしば。

名前：月崎 蒼乃

年齢：14歳

身長：152cm

体重：真つ黒に塗りつぶされている

スリーサイズ：不明

誕生日：5月10日

趣味：体を動かすこと

特技：特にない

顔：美少女。すこし赤みがかった長めの髪に、黒い瞳。

性格：面白いことや可愛いものが好きで、他人をおちよくることが
多い。

何も考えていないようでその実思慮深い……かも。

戦闘技術：鬼村はゴムゴムの実だけだと言っているがまだあるらしい。

滅多に使わない奥の手であり、見ることになるのはいつになるやら。

基本的な体術も中々のもの。

神様・S

銀次のとくと月崎のとくが同じ神様、姫香のとくと迅のとくが同じ神様。

ともにかなりの高位の神で、今後回数回でてくるかも。

以上、鑛がお送りした。

今後も『ネギま！』に入った人。『を楽しんでいただきたい。

銀次達のハチャメチャ（？）ライフをお楽しみに！

みたいなみたいな♪

14 人物紹介。主人公以外は手抜きです。（後書き）

これを14として入れた理由？そんなの数字がずれて面倒だからですよ。

15 日常、というよりコマ稼ぎ。(前書き)

エヴァヒロイン化についての票が全然集まらなかったんで、9/6一杯まで募集することにしました。感想のところによりしくお願いします。

15 日常、というより「マ稼ぎ」。

蓋を開けたらおはようございます（意味が分からない）、鑓 銀次です。

楓と訓練をしに来ました。

「よう楓。精進してっかー？」

「おー銀くん。3日ぶりでございますなあ。」

今まで触れていなかったことなのだが、楓は俺のことだけくん付けである。この間理由を聞いてみたんだが。

「うむう…昔これで定着してしまったでございますからな。……嫌でござるか？」

慌てて否定した。あれは卑怯だとおもっ。

「さて銀くん、今日は何をするでござるか？」

楓の声で現実に戻される。

「そうだな…今日は久しぶりに模擬戦をやろうか。

ルールは奇襲に暗器なんでもあり、ただし俺は武器と高等技術の使用不可、時間制限は20分。」

「了解でござる。」

「それじゃ、始めッ！」

同時に縮地でその場を離れる。

お互いに気配を消す。勿論俺も気配を消すだけで存在を希薄にはしない。

5分後。

ヒュヒュヒュン！！

突如飛来する手裏剣群をすべて回避。

見つかったか。

「その探查能力は脅威だ、なッ！」

師匠が考えた（実際は違う）技、爆縮地を使って楓の前に行き、鳩尾に掌底。

それをいなしした楓は回し蹴りを放つが、高い身体能力による俺の掌底をいなしたときにバランスが崩れており、楽々足に乗った俺が後ろに飛んで衝撃を殺す。

そのまま一旦距離を置き、気配を消して楓の後ろに回る。

木の枝から飛び出して掌底。

……手応えが弱い。

咄嗟に後方宙返り、後ろから迫る手裏剣群を回避。

着地したところを攻撃されるがいなしてから反撃。

軽く連続で攻撃するも捌かれる。

だがこれは予想通り。

これまた予想通りの反撃の正拳の力を利用して背負い投げ。

「チエツクだ。」

俺の拳が楓の数cm前で止まった状態。

「……また勝てなかったでござる。」

ショボーン…

擬音がつきそうなくらいに落ち込んだ楓。

「まあ地力が違うからな。技術だけで言えばかなり善戦だったぜ？
これからも励むように。」

「了解でござる…。」

寮へ歩きながら話を続ける。だが、俯いている楓は見慣れないもので、落ち着かない。

「ま、まあ、なんか奢ってやるからあんまり落ち込むな。」

すごく居心地が悪い。

「本当でござるか！」

おいおい、なんで急に持ち直す。

「お、おう。あんまり高いのはなしだな。」

「どこに行くでござるかな…」

結局、かなり嬉しそうな楓と一緒に昼飯を食うことになった。
店内にて。

「決めたか？」

「これと、これを頼むでござる。」

「了解。」

昼飯をばくつき、少し会話をすると、頼み事があると言われた。

「顧問？」

「そうでござる。我等がさんぽ部の顧問をやって欲しいのでござる
！」

……さんぽ部？

なんだそりゃ。

いや、読んで字のごとくだろうが。

何故今の話でこうなる。

「いや、面倒じゃないか？」

「そんなことはないでござる。一緒に散歩するだけでござるからな。」

んー…。

「…まあ、いいか。顧問位やってやるよ。」

「では早速部員のみんなに連絡するでござるよ！」

いやいやいや。

「別に明日学校で話せばいいだろ。」

「む？…分かったでござる。でも職員室に行って届けを出すのはこの後やるでござるよ？」

「分かったよ。」

こうして見ると子供みたいで可愛いな。昔が懐かしい。

「どうしたでござるか？」

「いや、可愛いなと思っ……………って何言っただよ俺！」

「いざっ！？」

「ちょ、忘れてくれ忘れてくれ！」

お互いに顔を真っ赤にして取り乱す。

やっちまった…！

しばらくしてようやく落ち着いた俺達。楓は未だに少し顔が赤いが。

職員室に行き、届けを出す。

手続きは問題なく進み、俺はさんぽ部の顧問になった。

「それじゃあまた明日な。」

「部活の詳しい日程は後々送るでござるよ。」

寮の前で楓と別れた俺は管理人室で師匠と話す。

「おかえり銀。」

「ども、ただいまです師匠。」

「アタシさ、ちょっと気になったことがあったんだけど。」

へえ。師匠が戦闘関連以外で色々考えるなんて珍しいな。

「アタシが教えた技術全部戦闘で使った銀と全力のアタシってどっちが強いかな？」

……前言撤回。やっぱり師匠は師匠だった。

「んー…多分互角位だと思うんですけどね。」

正直底が知れないのが師匠なので、これは願望である。本当どういう家系に生まれたのやら。

「そうねー。恐らくは同じ位よ。…戦る？」

「戦りませんって！大体俺の本気はマズいですって。」

「まあ、そうよね。つまないけど。」

師匠、バトルジャンキー戦闘凶（誤字にあらず）でさえなければいい女なんだがな…。

t r r r r

そこで俺のスマートフォンに電話が。スマートフォンはこの前買った。（これ自慢）

『もしもし、銀次先生ですか？』

最近よく聞くようになった声に、微妙な敬語。そして生徒内では珍しい俺の呼び方。

というか、

「夕映か。」

無駄に格好付けたことをここに謝罪します。

『あ、はい夕映です。今からちょっと来れるですか？』

「えっと、夕映の部屋に行けばいいのか？」

だったら直接呼びに来ても良さそうなものだが。

『いえ。エヴァさんの家です。』

というか、ログハウスだな。

「……………今から行く。」

師匠に行き先は行けないな。

どーしよ。

んー…。

電話を切って、師匠にどう言ったものか考える。

「何？親しげにファーストネームで呼んでたけど。」

「いや、ちょっとクラスの生徒に呼ばれちゃいまして。」

咄嗟に口をついたが、嘘は言っていない。

こういうのをあれか。戯言というのか。違うか。

多分師匠ならこれで

「確か銀の勤めてるのって女子中学校だったわよね？」

誤魔化され…え？

「そうですけど…。」

何故嫌な予感しかしないのだ？

なんというかこう、後ろに鬼的なものが顕現してる。

「何を…しに行くの？」

底冷えするような声。

……もうすぐ、夏、だよな？

「よ、用事は、聞きませんでしたか。」

思わず敬語。

いえ、元々でした。

呼ばれたのはエヴァの家だから、特訓関連だとは思うが。

「私も行くわ。」

いやいやいや、なんでさ？

「きよ、今日は個人的な予定というかなんというか。」

「ふうん？」

墓穴つたあー！

理由はわからないけども！

そんな気がするよ！

「ただだからですね？この間来た綾瀬夕映さんが、魔法について聞きたいことがあるとですね？」

どもるなどもるなどもるな俺！

ポーカーフェイスだ！

「……はあ。まあいいわ。」

たた助かったあああ！

生きた心地がしなかったよ。

「た・だ・し！やましいことはしないように。」

やましいことって何！？

き、気を付けよう…。

寮を出て、エヴァのログハウスに向かう。

そのころのエヴァハウス

「おい夕映。迎えを寄越すと伝えたか？」

「へ？……あああ！」

「馬鹿ものお！」

「茶々丸探せ！やれ探せさあ探せ今すぐ探せ！」

「イエス、マスター。……まだ寮を出たばかりのようで…この家と逆方向にすすんでいます。」

「ぬがああああ！電話しろお！夕映！」

「了解です——出ませんです。大方マナーモードにでもしてるんじゃないですか？」

「あ、んの馬鹿が！スマートフォンとかさんざん自慢してた癖に

！
」

「まずいですマスター。鑓さんが私の探査圏外に出ました。」

「ぬ、がああああ！あの馬鹿があああ！」

銀次視点に戻ります。

迷ったよ。多分迷った。

誰か知り合いいないかな…

あ、鬼村先生。

「鬼村先生ー。」

「ん、なんだい鑓くん。また迷子か？」

キツいな迷子ってのは。

図星だから何も言い返せないが。

「エヴァンジェリンの家って分かります？」

「ああ、それならあっちの……いや、案内しよう。」

？なんで言い直したんだ？普通に伝えてくれればいいのに。

しばらくして。

「ここがそうだよ。」

「すみません。助かりました。」

本当、助かった。まさか迷子になるとは…。

「なに。気にしないでいい。」

「茶々丸！行くぞ！夕映もなにかあれば連絡し——あ、銀次。と貴様は確か…鬼村とかいったな。」

エヴァが出て来る。

俺と鬼村先生はシンクロした動きでしゅたっ、と手をあげる。

「「「や。」」」

「や。じゃなあああい！銀次貴様！私がどれだけ心配したと…」

「あ、心配してくれたのか…って何に？」

「お前の迷子だあああ！」

さっきからずっと叫んでるな。

「はは、元気いいな。なにかいいことでもあったのかい？」

口をついて出て来たのはこんな言葉。あんまり考えないで言った。

横で鬼村先生が「忍野……」とか呟いてたが意味はわからないけど。

「お前のせいだああ……！」

「ま、まあ落ち着けて、な？深呼吸して。はい、ひっひっ、ふー。」

「馬・鹿・に・し・て・る・の・か・？」

びききつ。青筋が浮かぶ。

「すまん。調子に乗った。」

「……分かれればいいが。」

まだ少し怒っているようだが、許してくれた。

「あ、そうだ鬼村先生。ありがとうございました。」

忘れてた。空気だったな鬼村先生。

「あ、ああ。構わない。じゃあ。」

「すまないな、銀次が迷惑をかけた。」

なん…だと…。

「エヴァが頭を下げた…！」

「お前はどこまで人をバカにするんだ！」

やっべ。ついからかった。

「ごめんごめん。じゃあ中入ろうぜ。」

「だああっ！ペースが狂う！」

あはは。

面白いなエヴァは。

「結局、今日はなんで呼んだんだ？」

「……夕映と模擬戦をやらせようと思ってな。」

そっぴやエヴァもファーストネームで呼んでるんだな。

どうでもいいけど。

「いやだ。」

「なんでじゃあ！」

「いや、めんどい。」

それにしてもファンシーな部屋だなあ。

どうでもいいけど。

「ふん。お前は私に借りがあるだろう。」

「うぐ…。」

ちっ。

「一個消費、な。」

「当たり前だ。」

結局やることになったが、借りが一つ消費できたのはデカイ。

夕映と茶々丸さんと一緒に別荘に入る。

「じゃあ始めるぞ。銀次は本気で回避を続けるだけ。夕映が30分以内に防御させるか一発入れるかすれば夕映の勝ちだ。」

「え、えっと、そんなんでいいですか？」

夕映よ。俺の回避技術を舐めるなよ。

「かまわない。じゃあ始めようか。」

互いに向かい合い、構える。

審判は茶々丸さん。

ゲーム開始、だ。

先に動いたのは夕映。

というか俺は避けるだけだからな。

「張りばて！^{フェイク}フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ 魔法の射手・連弾・雷の119矢！」

おいおい、いきなりそんなに来るか！

「『ZOEBAUTINCO
通常↓回避特化』」

口に出すことで気を流しやすくする。気の扱いはあんまり上手くないからな。

眼と脚に気を流し、滑るように回避。

「『雷の斧』！！」

その間に詠唱を終えた夕映が魔法を放つ。

このコンボはキツいかな。

「E a s y
簡易！『電光石火』！」

真面目にやるよりも少し速度が落ちるが、問題なく回避。

夕映は砲台型か。

今度は武装解除。

回避が続けるが、砂煙で夕映を見失う。

っ！後ろか！

「B a c k
b o o s t
『後方へ』」

バックステップ、というか後ろに飛ぶ。

「フ ェ イ ク
張りばて！フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ 来たれ雷精
風の精……」

マズい！

「E a s y
S p e e d
T r i p l e
簡易！『速力』×3！」

「『雷の暴風』!!!!」

なんでこんなにでかい魔法使えるんだよ！そんな魔力ないだろ！バカス力撃ちやがって！

スピードをあげまくって回避するが、余波でよろめく。

「それまで！」

……へ？まだ30分たってないっしょ？

「余波も当たり判定だ。」

「嘘ん!？」

なんと横暴な。

「というかさ、あれなに？なんであんなでかい魔法をバカス力撃てる？」

「あれは張りぼてです。私が開発した威力を抑えに抑えまくった魔法で、燃える天空を撃っても魔法の射手くらいの魔力消費しかない

です。」

夕映が胸を張って言う。

でもさ、なんの意味が？

「牽制にでも使うのか？」

「まあ、そんなところです。」

まあ、見た目だけは派手だからな。牽制としては十分すぎるくらいか。

「しかし…負けたか。」

「おい銀次、貴様本気じゃなかっただろっ。」

ぬがっ！バレたか。

「あの、エヴァさん？銀次さんて本気を出すとどの位強いんですか？」

「そうだな…。封印が解けた私と同じくらいかそれ以上だな。」

そんなにか？

自分じゃどのくらいか分からないからな…。

「そんなに強いんですか…。」

「そうだな…銀次、お前の攻撃で一番威力の高いのはなんだ？」

うーん…

ハンニバルで叩く…いや。

気を使ってなんかやった方が強いな。

虚閃^{セロ}…かな。

ただあれはためがでかい。

まあ威力だけでいえば。

「虚閃^{セロ}だな。」

「それをやってみせろ。こっちにむかってだ。」

そういつて何もない方向を指す。

「えっと、出力は？」

「最大。」

えー。あれ疲れるんだよなあ…。

「や・れ」

「はいわかりました」

怖かったな…。

人差し指を突き出し、気を圧縮する。

ヴヴウン！！

黒い閃光が空を切る。

これが俺の虚閃^{セロ}。

半分固形化した気を放出するため、最高出力でやるとフラフラになる。

「な、な、な……」

夕映が絶句している。

ありゃ、やりすぎたか？

「あ、やべ…やりすぎた。エヴァ、ちょっとベッド貸してくね。」

「あ、ああ…。」

ベッドに入って、寝る。

さすがに疲れた…。

16 前々から書きたいと思っていた過去篇（前書き）

本編とはあんまり関係ありません。なかんじのコマ稼ぎです。

16 前々から書きたいと思っていた過去篇

ちつす。鑓 銀次だ。

「もしもし、学園長？」

『なんじゃ、鑓くんか。』

今、学園長に電話中だ。

俺から電話をすることは滅多にないが、急用だ。

「実は、明日の修学旅行、師匠が行けなくなっただんですよ。」

『なんじゃと！何故じゃ？』

「それが、先約があつたようで…。」

すっかり忘れていたらしい。

『ふお？…確か、傭兵業じゃったか？』

いや、傭兵とは少し違う。

確か師匠は…

「請負業、でしたっけ。」

『ふお、そんな感じじゃったかの。まあ、鑢くん1人でも大丈夫かの…?』

まあ、大丈夫だろ。鬼村先生もいるし。

「問題ないと思いますよ。」

『うむ。まかせたぞい。』

まかされました、っと。

電話を切った俺は、横でうなだれている師匠を見る。

どうやらかなり楽しみにしていたようで、今朝から酷く落ち込んでいる。師匠の仕事は最低でも5日くらいはかかるからな！。

え?どんなことをやってるか?

請負業。

それも、犬の散歩から要人暗殺まで。

金次第でなんでもやる。

……依頼人が気に入らないとかで拒否することもあるが。

俺も傭兵業やってるときに出会って弟子入りしたんだが。

最初のころはお互い警戒しまくりで大変だったが。というかそのころは全く適わなかったが。

そうだな。今は暇だし、師匠と初めて会ったときの話をしようか。

あれは今から5年前になるな。

く回想く

俺はある場所へ侵入する囷として雇われた。

攪乱だけが目的だったし、楽に行きそうだったんだが。

「はい、そこまでよ囷役。」

突然気配もなく後ろを取られる。

「ちっ！」

慌てて剣を振りかぶり、斬りつけても拳で逸らされる。

その後、3時間近い戦闘があったんだが、終始相手が有利だった。

しかもこっちは剣であつちが拳だ。

そのころはまだ投影なんて知らなかったから、元々持っていたその一本しか持たずに戦っていた。

本来の俺は二刀流なんだがな。

罔だからと油断していた。

3時間後には依頼主が死んでいて、戦闘は終わったんだが。

その日を境に仕事先でよく会うことになった。

大抵が敵同士だったが。

二刀流を使えばけっこういいところまでは行ける。

こう格好よく書いているが、その頃は俺は骨肉細工で真庭蝙蝠だったし、師匠は13歳だった。よって、大きな大人と小さい子供が戦闘していて、子供の方が押している、という光景だ。

正直なところ、恥ずかしかった。

何故か抜け忍扱いで、たまに甲賀連中に追われたが、勘違いだったらしい。

……勘違いだけであんなに一杯刺客よこすな。

で、偶然一緒にいた師匠と撃退、その後弟子入りした。

「…あんた、やるな。そんなちっこいのに。」

まあ、俺が言えたことではないが。

「誰がちっこいって？え？」

「……悪かった。」

気にしてたのか…。悪いことだったな…。

「まあ、アンタも中々やるけど、体の使い方がなってないね。能力に頼るところがデカい。主に防御。」

「そうだな……お前、俺にそういうことを教えてくれないか？」

「へ？それはつまり、アタシを師匠にする、ってこと？」

「ああ。」

というか、それ以外になにがある。

…駄目だ。思いつかない。

あ、そういえばこいつと会う時はいつも真庭蝙蝠の姿だったな。

骨肉細工を解く。

グチッ、バキッ……ゴリユッ……

「これが本来の俺。鑢 銀次。よろしくな師匠。」

あるえー？どうしたのかな師匠さん。

口をあんぐり。

……あ、骨肉細工がグロかったか。

なんか「まさかコイツだったとは……。能力くらい教えとけよ神……」とか呟いてるけど。

なにが俺だっただろ。

髪？

紙？

加味？

なんだろ。神？

いやそれより。

「大丈夫か？」

軽く呆然としてる師匠に声をかける。

「……………あ、ああ、こちらこそよろしく。アタシは鏝 姫香。」

なんかキヤラ変わってない？もつと短気だった気が

「今なんか失礼なこと考えたよな？」

…訂正。変わらないな。

相変わらずだ。

まあ正直可愛いけど。

「おい、なんか失礼なこと考えたろ？え？」

「いや、別に。」

「へえ。じゃあ何を考えてたんだ？」

「いや、可愛いなーと。」

瞬間、師匠の顔が真っ赤に染まった。

この頃は怒らせたかな？って思っていたが、最近『あれは照れたんだろっな』とか思う。

デリカシーがなかったか。

「ばばば、馬鹿野郎！ななな何を言うのよ！」

「まあ、よろしくたのむぜ、師匠。」

「あ、え？あ、ええ。よろしく、弟子。」

この日を境に、『真庭蝙蝠』は失踪した。

公式には死亡扱いになっている。

〈回想、終了〉

ちなみに、翼のことだけは師匠にもバレていない。

化け物だって逃げられそうな気もするし。

ハンニバル？あれはばれてるよ。召喚して取り込む（？）のは別にそこまでヤバくはないだろ。

なんか段々眠くなってきたな。

……え？マナとどうして知り合ったかも気になる？

さ、作者のコマ稼ぎじゃないんだからねっ！

宇宙意思がツンデレっているが、マナとの出会いか…。

懐かしいな。

えっと、確か6年程前かな。

あの時は――

く回想く

「くそっ！なんで中東まで来て迷子にならなくちゃならねえんだよ！地図貰ったのに！」

俺は迷っていた。

物理的な意味で。

地図見ながら歩いていたんだが。

ここ、どこよ？

依頼主どこよ？

………ちっ。油断した。

気が付くと、複数の気配に囲まれている。

気づかないふりをして、さりげなく人気のない場所に向かう。

ちなみに姿は生まれたまま、鑢 銀次。

真庭蝙蝠の姿は目立つし、有名になってきている。

囲まれたのは恐らく、さっき口から出した刀が原因だろう。

警戒を怠ったのはまずかったか。

路地裏の突き当たりで立ち止まり、振り返る。

ザッと2、30人か。

先頭の男と、従者らしき女の子以外は雑魚だな。

問題はその二人だ。

ちなみに、その女の子がマナだった。

ハイド氏に任せれば問題ないが、ほぼ間違いなく過剰な暴力。よくて半殺し。最悪皆殺し。

しかし、最近とんと出てこない。

というかこつち（今世）に生まれてからは一度もない。

筈。

取り敢えず口を開くか。

『英語で構わないか？』

英語で問いかける。

『構わないが、君は日本人みたいだな。日本語でもいいよ？』

思ったより好青年だな。

隣の女の子はさつきから警戒しまくり。

「すまないな。日本語にさせてもらおう。で、こんな幼気^{いたいけ}な男の子捕まえて、なんのつもりだ？」

「幼気な男の子は口から刀だしたりしないけどね。」

綺麗な発音。日本人か？

いや、見た目からしてそうだな。何故気づかなかったのだろう。

認識障害か？いや、違うか。

俺が気づかなかったただけだな。

「それもそうか。で、そんな俺をどうする？」

「少し来て貰って、事情を聞きだいたいが。」

む。もしかしたら依頼主のところに案内してもらえるかもしれない。

あ、今の俺餓鬼だ。

……まあ、依頼主には使者ってことで行くか。

「その位だったら構わない。案内してくれ。」

先導する青年。

睨みつけてくる女の子。

警戒度が半端ない周囲。

欠伸する俺。

「で、君は何をしていた？」

「あー、真庭蝙蝠って知ってる？」

使者ってことで。

ここはなんとか誤魔化すか。

蝙蝠の服とかはアイテム欄にあるし。

「……知っているけど。」

「その使者、というか知り合い。こっちで仕事があるって言うんで依頼主に会いに来た。」

途端にざわめく周囲。

というか。

敵意が半端じゃない。

主に女の子。

青年からは殺気。

「恐らく雇ったのは俺達の雇い主の敵だね。つまり君と俺達は敵同士ってわけだ。」

青年の説明に思う。

抜かったああああ！！

少し考えれば十分にありえる話。

それを…

やっちまったよ。

というか蝙蝠の知り合いがこんなんだってことには騒がないんだな。

……… ああ、あの女の子がいるのか。

恐らく一つ二つしか変わらないんだろう。

「依頼主の所に行かれるとまずいからね。こちらで拘束させて貰うよ。」

まあ、いいか。縄抜けもあるし。

拘束。縄で簀巻きにされる。

んで、尋問。

ガキだからってんで拷問はされなかった。

「依頼主の名前は？」

「えっと……」

ちなみに、名前が伏せ字なのは作者が名前を考えるのが面倒くげフンゲフン。えっと、俺も覚えてないから。

「？あの男なら三日前に死んだが。」

嘘ん！？

三日前って……連絡あった翌日か。

「はあ……。じゃあもうここに用はないな。この組織、傭兵みたいなものか？」

「そうだけど……なにか？」

「ここに暫く居させてくれないか？それでも戦闘には多少自信がある。」

またざわめく皆様。

賛成二割、反対八割か。

まあ得体の知れない男だしな。

子供だからとかいう理由もいそうだけど。

「いや、そうだな。暫く置いて様子を見よう。俺は■■■■。よろしくな。ほら、マナも挨拶して。」

青年が言う。

「…………マナ・アルカナ。」

次にマナが。

随分思い切った行動をするんだな、この青年。

得体の知れない男を組織に置くとは。

というか。

けっこう偉いんだな。

彼の一言で決まっちゃったし。

こうして俺はこの組織『カンバヌラエ・テトラコルドネス四音階の組み鈴』で暫く活動することになった。

オマケの後日談。

3週間後。

「ちょ、マナ！抱きつくたって！おい！」

マナに懷かれた。

「……別にいいですよ。」

というかこの頃はまだ喋り方が女の子っぽいんだな。

「おい、■■■■もニヤニヤしてないで助ける！」

■■■■とは例の青年、つまり“アイツ”である。

こういう行動を改めて思い返すと、マナは本当に俺のことが好きだったんじゃないか、と自意識過剰気味なことを思ってしまう。

「本当に離れろってマナ！」

美少……いや、美少女だから困る。

「や。」

こういうのも一々可愛……くそ！いつから俺はロリコンになった！

一つしか違わないから大丈夫だ、とかいう悪魔の囁きを思考から追い出しつつ、今日もマナを振り解こうと足掻くのであった。

……結局涙目&上目づかいに陥落する羽目になるのだが。

く回想、終了く

こんな感じかな。

■■■が死んだっていうのは本当にショックだった。

いい友人だったからな。

マナにも翼はバレてない。

まあ、魔眼あるからな…

バレてるかも。

その他は全部バレてる。

緊急で何回か使ったからな。

正直、ハンニバルの防御は最強。

だってあらゆるものを喰らうオラクルな細胞があるんだぜ？

攻撃を喰うというどチートなことができる。

速すぎる攻撃とかは喰うのが間に合わないが、本当に速すぎないか
ぎりは絶対防御になるな。

見た目がアレだから滅多に使わないが。

「ふわあ——あ。」

欠伸が出た。

時間を確認すると、9：30。

あ、やべえ。段々目蓋が…

明日修学旅行だよ。

まあ、準備はしてあるから大丈夫か…。

そして俺は眠りについた。

目覚ましのスイッチは、入っていましたか？

16 前々から書きたいと思っていた過去篇（後書き）

コマ稼ぎはこれでおしまい。

次回から本編に戻ります。

エヴァちゃんに「エヴァちゃん言うな！」
いては、友達以上恋人未満でいきます。

知らない女と歩いてる銀次をみて、なんかわかん「おい！無視か？無視なのか？」ないけどイライラする程度。

エヴァちゃんさつきからうるさ「リク・ラク・ラ・ラック・ライラ
ツク　来たれ氷精、大氣に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を・・・
『こおる大地』」い・・・つてぎやあああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！

17 いつもよりちょっと短いかも。
(前書き)

展開が早くなってしまっている気がする。

17 いつもよりちょっと短いかも。

「ぬ、おおおおおおお！！！」

日頃のご愛読ありがとうございます、鑓 銀次です。

今なにをしてるか、ですか？

爆走しています。

どこを？

ははは、決まってるじゃないか。

線路を。

新幹線に間に合う為に、電車に乗るより速い自分の足を使っています。

まあ、新幹線と同じくらいなら出せるんですけどね。

さあ、そんな感じで爆走している俺だが、認識障害とか正直キツいから人目を避けてる。

「君が行くことはみんなは知らんからの？この手紙を当日、新田先生が誰かに渡してほしいのじゃ。」

とか言ってた。

勿論手紙は今、アイテム欄にある。

つまり、みんなは先に行ってしまったと。

「最、悪だあああああ！！！」

そこからダッシュ、改札を飛び越えて線路に向かう。

駅員が来る前になんとか…！

慌てて新幹線の線路に降り、ダッシュで皆様を追いかける俺。

どの新幹線に乗るかは分かるから探すぞ！

実は集合場所は大宮だったことを知るのは、修学旅行の後の出来事。

爆走中 Now Running……

2時間後。

見えた。あれか。

ドアをこじ開けて滑り込み――

「カエル？」

カエルにお出迎えされた。

あ、式神か。

というか何故にカエル？

いや、そんなことはどうでもいい。

フッフ、俺は今機嫌が悪いんだ（八つ当たり）。

「ヒヤッツハアアアアアア！！！汚物は消毒だアアアアア！！！」

蹂躪され、穴の奥へと突っ込まれるモノ。

訳：拾い集められ、ビニール袋につっこまれるカエル。

カエルの多い方へ向かい、集める。

瞬く間にビニールは一杯になった。

ははははは！俺に勝とうなんて100年早えんだよ両生類があああああああああああああ！！！！

はっ！

気がつくと、3-Aがこっちを見ていた。

「「「「「鑓先生！！？？」「「「「「

「お？おつ、鑓先生だぞ。」

なんだよ、いきなり叫ぶな。

びっくりするじゃないか。

「どうしてここに!？」

朝倉が聞いてくる。

「あ、ああ、それはだな——」

そこまで言った所で後ろから声を掛けられる。

「どこの世紀末の人間だい君は。」

後ろを見ると、呆れた顔をした鬼村先生。

ちようどいい。生徒達との会話を中断し、質問する。

「鬼村先生、あの、新田先生います？」

案内してもらい——電車内で迷うわけないのにわざわざ先導された——、学園長からの手紙を渡す。

その後、3—Aの生徒に簡単な事情を話し——「学園長のせい」って話したらクラスの半数が苦笑いして納得した——、トイレに向かう。

ハア…。

疲れた……あ、桜咲さん。

何かの手紙を持っている。

後ろには式神らしき紙きれ。

「桜咲さん。それは？」

「あ、鑓先生。これはネギ先生が西の長に渡す親書で……」

と、そこまで説明してもらったところで

「待つて〜！」

ネギ君が入ってくる。

ん？肩にいるのはオコジョ妖精か。

前から居たっけ、そういや。

「これは貴方のですか？」

確認する桜咲さん。

いや、俺に説明してたんだから言う必要ないだろ。

「あ、はい、ありがとうございます。」

お礼を言うネギ君。

肩のオコジヨは警戒したような顔をしている。

何を考えている？

「気を付けた方がいいですよ。特に向こうについてからは、ね。」

意味深なことを言い、こっちを何やら軽く睨みながら去っていく桜咲さん。

いや、何故にらまれた？

んー…

わかんないな。

まあいいか。

トイレ行こ。

清水寺にやってきました。

「京都——っ！！！」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつ！飛び降りれっ！」

「では拙者が……」

「おやめなさいっ！！」

やって…きました。

「ここが清水寺の本堂、いわゆる「清水の舞台」ですね。本来は本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらうための装置であり国宝に指定されています。有名な「清水の舞台から飛び降りたつもりで……」の言葉どおり、江戸時代234件もの飛び降り事件が記録されていますが生存率は85%と意外に高く……。」

「うわっ！？変な人がいるよ！」

「夕映は神社仏閣仏像マニアだからね。」

「うわー！いい眺めですね！」

やつ…て…きま…した…ッ！

かなりのハイテンションだった筈の俺が可愛く見えるぜ…。

恐るべし、3―A。

現在、縁結びの岩の前に来ています。

20m程ある石と石の間を目を瞑って行けると恋が成就するとか。

雪広さんと佐々木さん、宮崎さんが目を瞑って岩に向かう。

………すごいな雪広さん。目瞑ってんのに真っ直ぐ言ってるよ。

雪広コンツェルンとやらの英才教育の賜物か。

恋の心眼術。さっすが！。

「これが私と某N先生の愛の力ですわ！」

ショタコンな発言がなければ尊敬できるのにな…。

勿体無い。

「ひいひいっ！」

「またカエルー！」

「何だ何だ？」

落とし穴？

つつか、またカエルかよ。

そういや昔から楓はカエル苦手だったよな…。

電車でも気絶してたし。

デカい弱点だ…。

そんなことを考えながら落とし穴に近寄り、適当に二人を助け起こして先に進む。

後ろでは唯一無事だったらしい宮崎さんがゴールしていた。

2人の嫉妬の視線に怯えていたりするが。

「ういゝ」

「ひつく…もつと飲む」

なんだこりゃ？

音羽の滝に酒が混じってるのか。

随分悪質な悪戯だな。

つつつかさ。

俺ってネギ君の補助と、木乃香の護衛として来たんだよね？

なんかしなくていいのかな？

ま、いいか。（適當）

「む？どうかしたのですかな？」

げ、新田先生。

こりゃ酒飲んだってばれるとまずいぞ…。

どうするか。

「い、いえ、一部の生徒が疲れてしまったようで…」

グッジョブ鬼村先生！

君のフォローは助かるよ！

つつかみんな寝てるし。

ネギ先生と3人でバスに生徒を運び込む。

あるえー？

この人。

そう、つまりは君だよ。

楓よ。

「それ寝たふりじゃないか？」

「…バレてたでござるか。」

起き上がり、てへっ、と笑って舌を出す。

妙に色気があって、目を逸らしてしまった俺は悪くないはず。

……逸らした先で、寝ぼけた生徒の服がはだけていて、下着が見えてしまっても。

「銀くん？何を見ているでござるか？」

ガタガタガタ……！

膝が笑う。

おい、いつから後ろに夕映がいた？

まずッ……

逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ！！

動け！動けよ！俺の脚！

「ナ、ナニモミテマセンヨ？」

「うふふふふ……」

「ふふふふ…」

くっ、来るな、来るな!!

ああああ!!!!

【ここからはR18指定がかかるため、表現できません。おもにグロ的な意味で。】

17 いつもよりちょっと短いかも。
(後書き)

俺はロリコンじゃない！

すいません。言ってみただけです。

18 やっぱりオリキャラは出さない方向で。(前書き)

修学旅行初日その2になります。

その3くらいまでやる予定です。

18 やっぱりオリキャラは出さない方向で。

「知らない天井だ…。」

目が覚める。

周囲には誰もいない。

う…っ。

なんだ？

俺はいつ眠ったんだ？

確か…修学旅行に来て、清水寺に行ったんだよね…

落とし穴に委員長たちが落ちて…

音羽の滝に酒が混ざってあったんだよね…。

そこまでしか覚えてない…。

一体何があった？

……まあ、いいか。思い出したらマズい気もする。

風呂にでも入るかな。

く
くく
くく
くく
くく
く

鼻歌を歌いながら風呂場に行き、服を脱ぐ。

ガラガラ…

扉を開けると――

――ネギに覆い被さって、その…陰囊を掴んだ桜咲さんがいた。

ガラガラ…ガッ!!

無言で扉を閉めたが、桜咲さんに足を引っ掛けられて止まった。

「いや、あの、誤解ですッ!!」

「何が!?!いや、俺のことはあれだ!ケン•ツキーおじさんの置物だとも思っていないからッ!続けて構わないよッ!」

動揺から、お互いに叫ぶような声になってしまっ。

ネギ君は後ろでおろおろしてる。

「私達が何をしているように見えたんですかッ!?!」

「いやそれは、あれだ!なんというかだなッ!その、なんだッ!淫こ!「ひゃああああ!!」ッ!」

悲鳴。

少々気が抜けているがこれは――

「お嬢様！」

「このかさん！」

「木乃香かッ！」

3人で同時に駆け出す。

声のした場所に行くと、木乃香が剥かれかけていた。

即座に危険はないと判断し、後ろを向く。

目の前には壁。

「お嬢様に何をするかッ！」

目の前には壁。

「せつちゃん、おさるさん切ったらあかんよ。」

目の前には壁。

「し、しかし…」

目の前には壁。

「ひゃ、ひゃあ！やめてーな。」

目の前には壁。俺赤面。

「神鳴流奥義・百烈桜華斬！」

目の前には床。余波でこけた。赤面していると警戒弱くなるのな。

「あれ？紙やん。」

目の前には壁。起き上がった。

服を着る音。

目の前には壁。多分俺真っ赤。

赤い顔が直ったのを確認し、しばらくして振り向くと。

ネギ君が一連の出来事をガン見していたことに気付いた。

なんて羨まげフンゲフン。けしからん。

ネギ君は英国紳士（笑）だよ…。

「じゃあネギ君と桜咲さんは続きをやってきて構わな「やりませんッ！！」……………そうか。」

いや、本当に何も言わないから。

「あれは、あの、あれです！ネギ先生が隠れててですね、気配に反応したと言いますか、それでなんですよ！」

ふーん。

「……まあ、そういうことにしておくよ。」

「信じてくださああいー！」

閑話休題

木乃香を部屋に帰してから少し話をする。

「すまんすまん。誤解してたよ。」

桜咲さんに謝罪。

「やいやいやい！あんたはどうなんだ！関西のスパイじゃねえのかい！？」

オコジヨ…

んなわけないだろ？

そして話の腰を折るな。

オコジヨの声にネギ君とアスナと桜咲さんが反応した。

「鑓先生、それ本当ですか？」

「ちょっと、本当なの？」

「鑓先生…？」

はあ…俺は京都出身なわけじゃないんだがな。

「事実無根だぞ…。」

確かに神鳴流も多少は使えるが。無手の技に限り。

旋一閃とか。

「スパイじゃないって証拠はあんのかい！」

「その言葉、そっくりそのままお返しするが？」

うつ、と一瞬言葉に詰まるが、すぐに反論してくる。

「本来来るはずのない修学旅行に来るし、誰もアンタの出身を知らねえんだぜ？」

「出身地は楓と一緒にだが。」

やっぱり即座に返答する。

「楓つてのは…あの忍者の姉さんか。つつつことはアンタも忍者なのか？」

「忍者？なんのことだ？楓も別に忍者じゃないだろう。」

嘘だけど。

まあ、一応否定しておこう。

つてことで。

なんか3人と1匹（ネギ君、アスナ、桜咲さん、オコジョ）がみんな「この人もか…」とか言ってるけど。

何がだ？

閑話休題（本日何度目だ？）

あの後、疑いを解くことに成功。其処まで確信や証拠があったわけではなかったようで、簡単に論破できた。

「まあ、俺が関西のスパイじゃないってのは分かったか？」

「……へい。疑ってすまなかったっす旦那。」

旦那？

俺のことか。

なんかむず痒いな。

その後。

アスナが木乃香と同じ部屋、その他は適当に見回ることになった。
護衛である桜咲が同室のほうがいいが…疎遠なんだっけか。

小腹が空いたので一旦部屋に戻り、食い物か飲み物を探して鞆をあさる。

見つかった物を取り出す。

《抹茶コーラ・低カロリー》

これは…カロリー以前の問題だろう。

《ポーシヨンくさや風味・微炭酸》

ポーシヨンって何！？俺のHPはMAXよ！？

《しるこサイダー》

相容れない二人に芽生えた愛…ガクガクブルブル。

《いちごおでん》

どっかで聞いたぞこれ…殺されかねない味だろうな。

《ドリアンぷりん》

蓋が閉まっても香りがする。…牛乳こぼして放置したような香りが。

《ゴージャコヒー牛乳》

苦さも二倍！ってか…。というか牛乳はマズいだろう。責任者出て来い。

……間違はなく師匠の悪戯——いや、嫌がらせだな。

一番マシそうな《抹茶コーラ・低カロリー》をひつつかみ、見回りを続ける。

微妙な味わいだった。

夕映はなんでこんなが好きなんだろうな。

しばらくの間見回りが続けていると、二つの気配がホテルから出て行くのを感じた。

……木乃香か！

ネギ君に電話を掛ける。

「もしもし、ネギ君か？」

『はい、鑓先生ですか？』

脳天気な声が響く。

まだ気付いてないな。

「木乃香がさらわれた。先に追いかける。アスナと桜咲さんと呼んでから来てくれ。」

『えっ！？このかさんが！？』

驚く声を聞きながら電話を切り、夕映にも電話する。

生徒が携帯を持っているのは違反だが、今回ばかりは助かった。

「木乃香がさらわれたのは知ってるか？」

『はい、知ってるです。』

「今回はお前は部屋で待機していてくれ。」

『な、なんでですか!』

激昂する夕映。クラスメート思いない奴だな。というか今トイレか? 声の反響具合からして。

「そこまでの大事じゃないし、新田先生や他の先生を誤魔化す役になって欲しい。頼めるか?」

『…………貸し一です。』

ちやっかりしてやがる。

思わず苦笑を漏らす。

「わかった。よろしく頼むな。」

電話を切ってホテルを出る。

追っている途中、ホテルから出て来る気配を感じた。ネギ君とアスナ、桜咲さんに鬼村先生だ。

木乃香に追いつくのに問題ない速度だと思った俺は4人を待った。

「鑓先生！このかさんは？」

ネギ君が話しかけてくる。

「すぐに追いつく。早く行くぞ。」

4人に速度をあわせて進んでいく。

少しして、前方に猿の着ぐるみを着た女が見えてくる。

あいつはホテルにいた従業員！

くそ、既に潜入されていたか…。

木乃香を抱えた猿女が駅に入っていくのを確認し、追って改札を飛び越える。

人払いの結界か、誰もいない。

電車に乗り込む。

端まで追い込むが…

女は札を手取る。

「ヤバい！この密室で広範囲の攻撃をされると…！」

鬼村先生が慌てるが、女はにやりと笑い、言を紡ぐ。

「おれさん、おれさん、ウチを逃がしておくれやす」

途端に札から溢れ出る水。

逃げ出すのは容易だが…

鬼村先生と目を合わせる。

この前話を聞いたところ、桜咲さんは木乃香の幼なじみだそうだ。昔川で溺れかけたことがきっかけで疎遠になり、さらにはなにか隠していることもあるとか。状況から考えると、やはりこれをバネにしてもらつと成長の目処がたつか…。

ここは桜咲さんに任せるのが妥当だな。

一瞬思案してから目を見開き、桜咲さんが斬空閃を放つ。

電車からの脱出に成功。

京都駅の大階段で猿女に追いつく。

「京都大文字焼き！」

大の字の形をした炎が迫るが、

「水遁・水龍弾の術！」

すかさず鬼村先生が鎮火。

あの人は忍者か…？

的を得ている（くま風）

大文字焼きが並の術者では太刀打ちできないと言っていた猿女は驚きながらも式神を呼び出す。

自信があつた技を破られても冷静なのは流石か。

呼び出された式神は所謂善鬼、護鬼。

詳しく言えば、猿鬼、熊鬼である。

それに対抗するべく、

「アデアット
来たれ！」

アスナがハマノツルギを呼び出す。

ネギ君との仮契約か。バクティオー

ハマノツルギとはまた随分な大物を引き当て——え？

——ハリセン？

「ハリセンじゃないのよおお！」

アスナが思わずといったように叫ぶ。

「おい、アスナ！どうするんだ！」

「ああもう！……仕方ないからこのままぶっ叩く！」

をいをい…

内心で突っ込む俺の横を通過し、桜咲さんとアスナが式神に向かっていく。

間抜けな見た目に反し、中々に俊敏、剛腕なのだが…

ハマノツルギは伊達ではない、か。

一度打ち付けただけで式神は還っていく。

相性がいいな。

「もう一匹もまかせて、このかをお願い！」

アスナの言葉にしたがい、俺、桜咲さん、鬼村先生が術者に向かう。

だが、

ガキン！

ドガッ！

ゴッ！

全員が横から乱入された。

桜咲さんは、ゴスロリの二刀剣士。

鬼村先生は、白髪の少年。

そして俺は――

「師匠！？」

――師匠、鏝姫香だった。

18 やっぱりオリキャラは出さない方向で。(後書き)

なんか今までと文体が違ってくる。

19 前回いいところで切った意味がない。

前回までのあらすじ。

木乃香がさらわれ、それを俺、ネギ君、アスナ、桜咲さん、鬼村先生の4人が追いかける。夜闇を切り裂く6つの影。そこへ、突如乱にゆ（以下略

そして今。

「師匠!？」

俺の前には師匠がいる。

「ハイ、銀。ご機嫌ね。なにかいいことでもあった？」

いつも通りの師匠。

「なんで師匠がそっちに付いてる!」

いや、まさか…仕事って、これか？

「あら、気付いた？まあ銀と戦うってのは予想外だったけど…この前、本気のアタシと本気の銀、どっちが強いかな、って話したじゃない？」

確かにした。だが、まさかこんな状況で戦うことになるとは。

俺は師匠と戦いたくない。本気を出したら下手したらどつちかが死ぬし、長い間一緒にいた師匠だ。模擬戦はいつものことだが…。右を見れば白髪の少年と鬼村先生が戦っている。鬼村先生が押しているが…猿女（もう着ぐるみは脱いだ）の呼び出した鬼——酒呑童子も合わさって苦戦している。木乃香の魔力で呼んだのだろう。軽い暴走状態だ。が、それ故に厄介。

左では桜咲さんがゴスロリ剣士と戦っている。ほぼ互角。

ネギ君が捕縛呪文を元・猿女に放つが、木乃香を盾にされて慌てて逸らす。

捕縛呪文だろうが…！
思わず苛立つが、

「じゃあ私達も始めます、かッ！」

師匠が飛び出してくる。

トレース・オン
「投影開始」

両手に剣。気で強化された蹴りを受け流す。気によって、刃物ではそうそう切れない。

ちなみに『投影開始』は、言わないと師匠に怒られるから言っている。

なんで怒るのかな？

一度距離を取る。

インファイトで行くか。

刃渡り20cmほどのナイフを両手に投影、逆手に持つ。

滑るような軌道で踏み込み、その足を軸に右回転。

右手のナイフを突き立てるも、手を蹴り上げられる。

が、予定通り。その勢いを利用してサマーソルト。後方へ行き、左手のナイフを捨て、一瞬で黒鍵を3本投影し、投擲する。
まあ勿論黒鍵も師匠の考案した武器なのだが…。

今度は武器を捨て、影に気を潜らせる。

ずぞぞぞぞ…

影の槍の切れ味は一流。師匠も本気で防御に回らなくてはいけない。

まあ、その間は集中のため俺も無防備になるのだが。

直ぐに影での攻撃をやめる。

これは通用しなさそうだ。

NOLEADER
「通常↓重撃」

言霊を唱え、一撃を重くする。

流石に師匠相手に仮面は付けられないが、一応本気だ。

大型の戦斧を投影し、飛びかかる。

振り回すが…当たらない。

こうなったら師匠にも見せていない奥の手を使うか。

ポケットからある物を取り出し、口に含む。

サイズは空豆程度。

刮目せよ！これが限度なく鍛えられた、肺活量だッ！

思いつ切り息を吸う。

物を噛み砕き、息と一緒に吐き出す。

「ぶひゅうつうつー！！！！」

俺の口から放たれる、煙。

眼くらましだ。

効果範囲は小さめに。

一瞬怯んだ師匠に斧を振りかぶり――

叩きつける。

咄嗟に両腕をクロスさせた師匠が受け止めるが、足下の階段が砕ける。

と、そこでネギ君が木乃香を取り返したらしく、元・猿女、白髪の少年、ゴスロリ剣士、師匠は帰っていく。

酒吞童子は白髪の少年が居なくなったため、直ぐに鬼村先生が還した。

さっすがー。

その後、木乃香達が部屋に戻り、みんなが寝静まった頃。

俺はホテルの裏手に来ていた。

原因は、さっき電話して呼んでおいたマナと会ったためである。

別に18禁的なことはないから安心していい。

今日にでも謝って起きたかったからである。

「何の用だ。」

仏頂面でやって来たマナ。

俺は少し恥ずかしく思いながらも頭を下げる。

「その、悪かった!」

直球。これしか手段はない。

頭上でマナが少しあたふたしているが、すぐに持ち直して聞いてきた。

「ど、どうして今更謝るんだい?」

少しだけ、角が取れた気がする。

「いや、ずっと謝ろうと思ってたんだが…どうにもタイミングが掴めなかったというか勇気が出なかったというか…」

どうにも後半がごによごによした感じになってしまったが、大意は伝わった筈。

「じゃ、じゃあ、どうして私が怒ったかは分かったか?」

少し期待するような、それでいて不安がるような。

結局、例の当てずっぽう以外思いつかなかった。

「いや、あの、その、あんまり…」

誤魔化す。

「どうなのかを教えてくれないか？」

流石に無理か…。

正直に言うしかあるまい。

「…根拠のないことしか思いっかなかった。」

「それは、どんなことなんだ？」

「いや、あの、なんというか、その。」

恥ずかしすぎる。

主に勘違いだった場合。

まあ、勘違いじゃなくてもそれはそれで困ったことになるんだが。

マナは好きだが……恋愛とは少し違うモノだろう。これは。

「……………はあ。まあ、いい。聞かないでよくよ。」

た、助かったーーーー！！！！

「聞いたら聞いたで困っただろうからね……」

「ん？なんか言ったか？」

声が小さくて聞こえなかった。

「い、いやいやいや。なんでもない。」

ならいいが。

「本当に悪かった。こう、心配、というのかな？させて。」

再び謝る。

45°に腰を折って。

顔をあげると、また少しムスツとしたマナがいた。

「まだ完全に許したわけじゃない。……その、明日の班行動で私の班と一緒に行動してくれ。」

！

驚いた。まさかマナ（大人バージョン）のこんな可愛い表情を見るとは。

え？どんな表情かって？教えてやらな——やめて！石投げな、あたっ！ちよ、言うから、言うから！

電波受信があつたが、今のマナの表情は、いつもの冷静な顔からは想像もつかないものだった。

もじもじしながら、頬をほんのり染めて、しかも涙目で上目遣いにこつちを見上げてくる。涙目で。

大事なことなので二回言いました。

思わず赤面した俺は悪くない。

「ど、どうしたんだい銀？」

さらにそこから心配したように見つめてくる。

「あ、いや、その、お前の顔が可愛らしいと思う——いやもうホント何言つてんだよ俺！」

「~~~~~ッ!」

顔を真っ赤にするマナ。

最初のもっと大人っぽいかと思つたが…

なんか可愛いな。

!

ヤバイ。

さっきから煩惱に流されすぎだ！

「觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五——」

「ちょ、銀！経を唱えるのをやめろ！」

「——度一切苦厄 色不異空空不異色 色即是空 空即是色
受想行識 亦復如是 舍利子 是緒法空相 不生不滅 不垢不淨
不增不減 是故空中 無色 無受想行識 無限耳鼻舌身意——」

「やめてくれッ！」

ガッン！

頭を叩かれた。

ギターケースで。

「痛あああああ！！！！」

たまらず般若心経を中断、悶える。

ちなみにこの経、昔覚えた。

ちょっとした法力の勉強をしたんだが…

たいして出来なかった。

やっぱり才能か、それとも信仰か。

痛みが引いたのを確認し、マナと一緒にホテルに向かう。

アダルトな意味はありません。

明日の班行動、一緒に行動するとは言ったが…班員は大丈夫なのか？

まあ、マナだからな。なんか説得するだろう。

「今何か失礼なことを考えなかったか？」

「イエナンデモアリマセンヨ？」

思わず片言になる。

どうしてこう俺の周りの女は鋭いんだ…。

師匠しかり、楓しかり、夕映しかり、マナしかり。おまけにアスナまで。

あ、そういや夕映に借りが一つ出来たんだよな…。

なにさせられるんだろ。ガクガクブルブル。

マナと別れて部屋に戻り、時計を確認すると、

3：40。

えー。

最悪。

一度眠っちゃ起きられないと思った俺は、《ゴーヤコーヒー牛乳》の封印を解いた。

カフェインだけではないモノに期待して。

恐る恐る口を近づけ――

――、一気飲みした。

そこから先、俺の記憶はない。

19 前回いいところで切った意味がない。(後書き)

なんかこの人気絶してばっかだな。

20 なんか久しぶりに投稿した？（前書き）

マナのキャラも徐々に戻ってきたかな？・・・かな？

20 なんか久しぶりに投稿した？

「貴方は昨日もどこかに出掛けたそうですね、そもそも――」

結局新田先生の小言を貰った。

昨日の晩、いや、今朝早く。

ゴージャコーヒー牛乳を飲んだ俺は記憶がない。

気がついたら半裸で部屋の中央で、大の字で寝ていた。

ゴージャコーヒー牛乳、恐るべし。

「聞いているんですか！」

「はいい！」

しかし、周囲の目が痛い。

なんかもうアレだ。

一部爆笑してるよ。

おいそこ、笑いすぎで服がちよつとはだけてる。

そこも揺れる胸をだな…

やばい、またしても煩惱が。

（無色声香味触法　無限界　乃至無意識界　無無明　——　）

「ちょ、鑓先生！悟りを開かないでください！聞いているんですか
！」

結局、朝食食えなかった。

本日、修学旅行2日目。

奈良です。

「じゃあ、俺は4班と先約あるんで。」

先生ごとにどこかの班で回ることになっている。

「あれ？鑓先生私達と一緒に回るの？」

佐々木さんが聞いてくる。

「あ、聞いてなかったか？昨日マナと約束してな。あ、嫌か？」

同じ年くらいの男子と一緒に旅行っていうとやっぱり思うところがあるのか？

「まあ、私達はこの前助けて貰ったし、全然問題ないんだけどにやー。」

明石さん。貴方は語尾のにやーをやめてください。流石にもうお経は唱えたくありません。

「え？なに？何のこと？」

佐々木さんが1人だけ混乱している。

「ああ、まき絵はいなかったんだっけ？この間私達がナンパされるときに助けて貰ったのよ。」

助け舟とばかりに、大河内さんの状況説明。

「つーかマナよ。事情の説明くらいしておいて欲しかった。」

少し恨みを込めた目で見ると、顔を赤くしてそっぽを向いた。

なんかマナ、最近子供っぽいな。

と、今度はマナがじろりと睨んでくる。

やっぱり俺の周りの女は勘がいい。

絶対超・感あるって。

なんてアホなことを考えていると、何やら話していた運動部四人組が、ニヤニヤしながらマナと俺を見比べ始めた。

「いやあ…タツミも鑓先生も隅に置けないねえ！」

「はっ！」

思わず噴き出す。

「あ、あのなあ、俺とマナはそんなんじゃ…」

「そつ——そうだぞ。馬鹿なことを言うな。」

これ勘違いしてもしようがないからね？

「またまたー。先生も『マナ』なんて呼び捨てにしてるくせに？」

「そ、そりゃアレだ。昔馴染だからな。」

いくら1つしか違わないとはいえ……生徒にからかわれるのは余り嬉しくないな。

別にいいけど。

「……そういえばさ、いつ約束したの？」

うげ…。

昨夜だとか答えたらまた

「深夜の密会!？」

とか騒ぎ出すよなあ…。

どうしたもんか。
ぬあー。

「電話でもしたんですか？」

大河内さんの言葉。

いやもうホント助かったわ。

「そんなところだ。」

即答する。

「そっぴゃ昨日深夜にパルが『ラブ臭来ターーーーーー!!』と
か叫んでたけどそれじゃない？」

無駄に高性能な触角持つてるなアイツ…。

まあ、しかし、なんだ。

なんとか誤魔化すことに成功した、か？

それでは奈良を堪能しに行きますか！

鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿………!!!

見渡す限り鹿ばかり！

まあ、そんなにはいないが、結構いる。

みんなで東大寺にやってきた。

俺は何故か鹿から避けられる。

雌に限り。

雄は何故か角でつついてくるのだが。

あつ、ちよつ、いたつ。

こんな感じで。

正直、痛い。

明石達が鹿煎餅を買って餌付けしている。

俺は買っていない。

財布を覗き込んでから諦めた。

理由は、まあ、わかるでしょ？

マナは傍観している。

さつきは俺を見て嘔き出していたけど。

失礼な。

もしかして今手に持っている《ドリアンぷりん》が問題か？

匂いは酷いが味はいい。

匂いは酷いが。

「ちよ、先生それ臭っ！」

「ゆえ吉の同志ですか…」

「ちよ、早く捨ててー」

「なんやのこれー！」

「う……………」

とか言われた。

上から順に明石さん、大河内さん、佐々木さん、和泉さん、マナ。

——俺も好きで持ってるわけじゃないんだよ。

心の声は外に出さない。

そしたら余計捨てるって言われる。

だって勿体ないし。

味はいいし。

やみつきになりそう。

嘘だけど。

鹿と戯れる（？）時間が終わり、大仏殿に行く。

う、美しい…！

顔と座高のバランス、台座の蓮。

精巧な装飾。

さらにはあの柔らかな表情。

完璧だ。

「先生が見蕩れてる。」

「意外とこういうの好きなんですね。」

「当たり前だ。——詳しくはないがな。」

当たり前だ、のあとに、説明をせがまれそうだったので先手を打つ。すぐに残念そうな顔をする女子s。
俺は見るだけでいいんだよ。

——ん？あれは…ネギ君に、宮崎さん？

これは…雰囲気的にみんなが気づく前に移動した方がよさそうだな。

「ほらほら、さっさと次行くぞー。」

「え？先生今まで見入ってたのにいいの？」

「いいんだよ」

さり気なくマナに目配せ。

みんなを巧いところ誘導してくれた。

覗き見たい、という出歯亀が鎌首をもたげたが、かぶりを振って抑えつけた。

「……………？」

これを見て、マナが首を傾げた。

次はどこに行くか確認したところ、結構票が割れたが（行き当たりばったり）興福寺に行くことになった。

阿修羅かわいいよ阿修羅。

そのうち『仏像萌え』とか出るんじゃないだろうか、というレベルで熱中した。

——観光とか初めてだったんだよ。

千手観音は正義だと思った。

生徒にちよつと引かれたのはかなりキツかったが。

エヴァも、封印解けてりゃ一緒に来れたのに。

その後、みんなで甘味処に入った。

俺の奢りで。

「おいおいおいおいおい！150円の鹿煎餅を買うことすら躊躇う俺に甘味を奢らせるのか！？」

という必死の反論も虚しく。

「さっき覗いたが、金には不自由してないじゃないか。節約かい？」

バツチリ財布を覗いていたマナに論破された。

小銭がないから我慢してたのに…！

ああ、英世が、英世があああああ！！

現在の奢り状況。

明石さん：パフェ一個

佐々木さん：パフェ一個

和泉さん：宇治金時一個

大河内さん：餡蜜一個

マナ：餡蜜五個

「マナさんや。君は遠慮というものを知らんのかね？」

「知ったことじゃないよ。あ、あと二つ。」

こ、んの腹ぺコ娘が……！

残りの四人も目を丸くしている。

「まあ、なんだ。マナもこんнадし、もう少し食いたきやいいぞ。」

「う、うん」

「じゃあお言葉に甘えて…」

自分で言ったものの、結局英世が7人飛び立った。
一葉さんは留守だった。

店を出て、日も傾いてきた空を見上げる。

笑顔でサムズアップした英世が見えた。

お前の犠牲は、忘れない（30分）

閑話休題

そろそろ集合時間も近いので、集合場所である奈良駅に向かう。

道すがら、みんなで会話する。

「ところで、鑓先生この間すごい喧嘩が強かったけど、なにかや
ってるんですか？」

うおつ。

まさかのタイミングで話を振られる。

「ん、まあ、ちょっとな。」

「なんかこう……流派みたいなのってあります?」

流派か…。

技によって色々違うからな。

まあ、強いて言うなら、

「『鏝式総合格闘技』ってところか。」

「ほえー、初めて聞くなー。」

「まあ、マイナーもマイナー、超マイナーだからな。」

うん。師匠がいたら間違いなく張り倒されるな。

開祖だし。

つか、開祖であそこまでってかなり凄いと思う。
というかいつ考えたよ俺の3つ上。

「なんで先生はそんなマイナーなのやってるん?」

これは和泉さん。

「まあ、昔ちよっと師匠と一悶着あつて、な。」

「ふーん。気にはなるけど…まあええやろ。」

詳しいことは聞かれずにすんだ。

お、そろそろ奈良だな。

こっからまたホテルのある嵐山行くのか…

ダルいな。

集合後、電車でうたた寝をしていると、隣の車両で師匠が手を振っていた。

鬼村先生に声をかけて師匠のところへ行く。

「一応『敵』なんですから、もうちょっと警戒してくださいよ…。」

「まあまあ、こんな人の多いところじゃ襲わないわ。ちょっと話があるだけよ。」

話？

それは個人的な話か、仕事についてか。

木乃香を渡せっていうなら、絶対に聞けない。

俺は警戒を高め、周囲を索敵する。

「誰もいないわ。ただ、ちょっと停戦協定を結びに。」

戦闘凶の師匠が停戦？

訝しむ俺に対し、師匠は実に堂々と、隙だらけの格好である。

「どういふことですか？」

「いやなに。アタシとしても銀とはあんまり戦いたくない。だから、戦闘するなら他の人とやろう、って話。」

納得がいった。

つまり師匠は、暗に

『手の内を知っている同士で戦っても詰まらない』

と言いたいのだ。

そついうことか…。

「まあ…鬼村先生でも誰でもいいですけど、殺すのはナシで。」

その言葉に、心外だ、とばかりに半眼でこちらを睨みつける師匠。

「当たり前じゃないの。一応仕事場同じなんだから。」

———どうだか。

盛り上がると歯止めの聞かない師匠のことだ。

釘は刺しておかなくちゃいけない。

「じゃあ俺はあの白髪の少年でも借りますわ。」

適当に手をヒラヒラ振って元の車両に戻る。

師匠は次の駅で降りていった。

その後、生徒に師匠についての説明を求められへとへとになった俺は、ホテルに戻ってすぐに仮眠を取った。

20 なんか久しぶりに投稿した？（後書き）

なんか、まあ、アレだ。

このせりふが多いです。

21 最近ネタが思い浮かばない・・・（前書き）

もう一つ、ネギま！に入った人。TS 憑依verというのを始めました。

見てくれると嬉しいです。ハイ。

21 最近ネタが思い浮かばない・・・

最悪だよ全く。

「朝倉に魔法がバレたあああああっ!？」

俺が風呂に入ろうとおもってほくほく顔で歩いていたらアスナのこの台詞。

思わず膝をついた俺は悪くないだろう。

一緒に風呂に向かっていた鬼村先生が「超の野望達成ってこんなに早かったっけ?」とか呟いてるけど、超ってあの超? 野望ってなに?

「ネギ。あのオコジヨと楽しくやってけ。な?」

もう助からないだろう。
オコジヨ生活の始まりだ。

「ひどいよ鑢先生...」

涙目でこつちを見上げてくるネギ。

周りのみんなも諦めに似た表情。

そ、そんな表情したってどうにもならないもんはならねえよ。

と、朝倉がこちらにやってくる。

肩にはオコジヨ。

あいつ、まさか寝返っ……………

「やあやあ、鑓先生方。私はネギ先生と話があるから外してもらってもいいですか？」

「ブンヤの姐さん、魔法関連のことなら旦那達も知ってますぜ。」
オコジヨの言葉。

やっぱりお前寝返っ……………

「あ、そうなの？じゃあネギ先生、

「あの、朝倉さん！」

なに？」

「魔法のこと、黙っていてくれませんか？」

「そのことなら大丈夫よ。私、カモくんの熱意に絆されちゃった。」

寝返ったわけじゃないのか。

あれ、朝倉ってこんなキャラだったけ？

まあ、いいか。気配も朝倉だし。

「しかし、鬼村先生に、鑓先生まで関係者だったとは驚いたー。」
までとはなんだまでとは。

まあいいけど。

「やっぱり記事にしちゃお」「」「」「やめてください」「」「」
……冗談だから。」

全員が斜め45°に腰を折った。

苦笑いの朝倉。

全員が『助かった』といった表情で解散することになった。

俺は風呂に入ってから自分の部屋（鬼村先生と二人）に行き、見回りを任せて寝た。

「『唇争奪！男教師共とラブラブキッス大作戦』！！！」

ふふふ。いい感じで盛り上がりそうじゃないの。

私が怪しい笑いをしていると、カモくんが話しかけてきた。

「姐さん、鑓の旦那は含めない方がよかったんじゃないですかい？」

「なんでよ？」

「いや、あの旦那、すぐに気づいちまいやすぜ？」

ん？

それはどういふことさ。

「なんかで監視してるの？」

「いえ、そんなじゃねえんですけど、やけに勘がいいんですさ。」

勘？

それだけでバレるほど私は甘くないのさ。

中々面白い展開になりそうだね。

鑓先生モテるし。

そこまで超イケメンってわけでもないんだけど…。

なんでなんだろ？

まあ、楓ちゃんにゆえ吉、たつみーあたり。

あと、アキラで裕奈がちょっと気になるくらい？

ちづ姉は…まあ、読めないけど、いい教師だとは最悪思ってるね。

おっと、妄想に浸ってしまった。

「おおーっと、龍宮、綾瀬コンビが真っ直ぐ鑢先生の部屋に向かっ
ていく！おっとさらに、こちらこ宮崎、月崎コンビはネギ先生へ！」

ありゃ、ネギ先生が増える！？

「ネギ先生が何人も！さあどれが本物なのかあ——っ！」

カモくんの仮契約魔法陣があるから、キスした人は仮契約する。

偽物とキスしたらどうなるのかな？

すごく気になるけど…

まあ、いいか。

実況を続けよう！

—

zzzzz・・・

私はどうしたいんでしょうか。

龍宮さんにくつついて来たはいいんですが…

どうにも胸が痛いです。

ふと、ある予感が胸をよぎります。

——ありえないです。

小さく首を降って否定した。

と、少し龍宮さんに離されていることに気付いて小走りで追い掛ける。

もうすぐ銀次先生の部屋に着きます。

色々とすつきりと出来るでしょうか…

zzzzz・・・フゴッ！

隣で綾瀬が考え込んでいる。

恐らく銀次が気になるんだろう。

大方自分の気持ちなんなのかなんのか分からないんじゃないか？

まあ教えてやらんがな。

その……恋、敵だし。

ああ、もう。最近は自分のキャラじゃない気がする。

部屋に入ると、鬼村先生はいない。

銀は…寝ていた。

ラッキーだな。

殺気や敵意がない限り銀は起きない筈。

「協力感謝するよ綾瀬。」

一言言つて、銀に顔を近づけ――

チュッ

——キスをした。

うん、ファーストキスではないけど…

ディープキスはやめてあげよう。

そっけつのはその、同意の上で、じゃないと。

自分の顔が赤いのを感じる。

——私は銀とキスをした。

誰にも聞こえないよう、小さく呟く。

ああ、満足。

——
——
目の前で龍宮さんが銀次先生にキスをしました。

どうしてでしょう。

胸が痛い。

もしかして、私は本当に銀次先生が…

1人、部屋を出ます。

鬼村先生はまだ逃げ回っているようです。

長瀬さんも銀次先生が好きなんだろうが…

今は新田先生と鬼ごっこしています。

そう、私は自分が銀次先生のことを決して考えないようにしていることに気づきました。

やっぱり…

——私は銀次先生が好きなんだろうか。

誰かに話したら笑われそうなことを考えてしまいます。

「らしくないです。」

無性に腹が立ちます。

私は部屋に戻り、布団を頭から被って目を閉じました。

――

「ふわぁ――あ。」

よく寝た。

ふと右を見ると、顔を赤くしたマナがいた。

「どうしたんだ？」

「ふぁっ！？……あ、いや、なんでもない。失礼するよ。」

ふぁっ！？って…

お前誰だよ…。

可愛すぎるだろ。

ふと、唇になにかの感触をかんじた。

？

どうしたんだろうか。

べつにどうでもいいがな。

まあ、キスとかされてたら流石に狼狽えてたかもしれないけど。

ははは。

orz

いかん。自分の彼女いない歴を思い出してしまった。

俺は部屋を出て、ネギ君を探す。

「あり？これは……分身か。」

なにやってんだろうなネギ君。

それぞれ、3-Aの生徒に密着している。

……………密着？

「なあにやってんだあああ！……！」

すぐに回収に向かう。

鬼村先生にも電話したが、

「今ちよつと追われてて余裕ないから……あ、大丈夫。命に危険はないから。頼…やつべ、来た！」

って感じだった。

どうなってたんだよ……。

結局俺1人。

最初に向かったのは最も切羽詰まっている夕映。

部屋にはいり、ネギの分身を蹴り飛ばす。

爆発。

収まると、顔を真っ赤にしたり真っ青にしたりと忙しそうな夕映がいた。

「どうした？」

「あ、い、いいいいえ。なんでもありませんヨ？」

いや、明らかに挙動不審。

「いや、あのさ…」

「本当に大丈夫ですッ！」

ガンッ！

ポカーン

蹴り出されてしまった。

………？

まあいいや。次。

古菲。

またしても似たような状況。

ドロップキック。

爆発。

楓と目が合った。

「よ、楓。………ってなんだよ、来るなあああああ！……！」

なんか鬼気迫る表情で追ってきた。

……ぴーん。

いいこと思いついた。

取り敢えず佐々木さん達の所に行く。

ネギ君の分身を蹴り飛ばし、啞然とする佐々木さん達の前で立ち止まる。

ギリギリまで引きつけて……

飛び退く！

チュツ…

後ろでなにか看過し難い音がしたが、精神力で振り返らずに走り去る。

25分後。

漸く終わった。

最後のアレなに？

まさか2体が変形合体するとは…

みんなを拷も…もとい、尋問したところ、今回の元凶は朝倉とオコジヨであることが分かった。

トントン。

「はい？誰で……………スイマセンデシタ。」

「だ、旦那…暴力は、だめですよ？」

「お前も同罪だオコジヨ。それに暴力は振るわない。O H A N A S H I するだけだ。」

この日、朝倉にあらたなトラウマが出来たらしい。

21 最近ネタが思い浮かばない・・・（後書き）

なんか・・・が多いなあ・・・

22 秘密の暴露はいつも突然です。(前書き)

ひさしぶりっす。

なんかもう大変っす。ハイ。

22 秘密の暴露はいつも突然です。

修学旅行3日目だ。

今日は完全自由行動。

昨日、アイツらが作っていた仮契約カードのうち、楓と雪広さんの
は消しておいた。

マナと俺のは本人が「消すわけがないだろう」って言ってたから、
持つてる。絵柄は、翼を生やした俺がデカいハンマーを持って格好
つけたものだった。

名前は…『大槌小槌』。能力は知らん。

ネギ君とアスナには鬼村先生がついて行くそう。

え？俺？

俺はアレだ。月崎に誘われた。
なんか

「今日は面白いことがあるからシネマ村に行きましょう」

だとか。

原作覚えてる人はいいいよなあ…

なんか親書の方でもあるみたいだけど、俺達はこっちでなんかする
みたいだ。

折角シネマ村に行くってことで、忍法骨肉細工で月崎の言った見た
目になった。

なんか銀髪天パの死んだ魚みたいな目えした男になって、変な着物を着せられてる。

こりゃあ……たしかこっちで読んだジャ○プの……銀魂だっけ。

うん、多分そうだ。道行く人達が「銀さん……」とか「天然モノだよ……」とか言ってる。

月崎もなんか嬉しそうだ。

「でさ、これからどうするんだ？」

「ちよつとしたデートよ。」

そついう月崎の服装は、何故か普段着なのである。お前も仮装しろや、と口を大にしている。まあ、私服も可愛らしいが。

まだ4月ともあり、白い長袖シャツの上から真つ黒な厚手のパーカーを羽織っている。少し長めの袖で手が半分隠れていて、そこがポイント高いな。

下は深い赤のミニスカートで、ニーソックスにローファーを着用している。

髪型は赤みかかった黒髪をストレートで後ろに流している。

思わずまじまじと見つめていると、俺の視線に気付いた月崎がニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた。

「うふふ、私に見とれてた？ん？よく見ていいわよ？」

その場でくるりと回って見せる月崎に、俺だけではなく周りの人達も見とれてしまった。

年相応の、異常なほどに整った顔で笑顔を作っている月崎は、なん

というか「すげー…可愛い」。

あ、やべえ声に出てた？

恐る恐る月崎の方を見ると、笑顔が固まっていた。

みるみるうちに顔を赤く染めていく。

「いやあのそのすまん。うん俺が言ったのはなんというか冗談というかいや間違いない本音なんだが決して聞かせようと思って言ったわけではなくだな……」

言い訳のように言葉を重ねるうち、月崎は胸に手を当てて深呼吸をすると、スッと手を前に出して俺の言葉を止めた。

「……………ちょっと、落ち着かせて。」

そう言っと、預けずに月崎が持っている俺の鞆——仮装してる人に下手な物は持たせられないそうだ——からお茶のペットボトルを取り出し、ごくごくと飲み始めた。

「あ、おい…それ飲みかけなんだが、気にしないのか？」

「じふっ…!」

あ、嘔き出した。

「げはっ、かほっ、けほっ、けほっ」

「お、おい大丈夫かよ。」

思わず手を出して背中をさする。
こいつ他人をおちよくるのは好きな癖に恥ずかしがり屋なんだな。
変わった弱点を発見した気分だが、今は俺も少しばかり恥ずかしい。
周りの男共から『イチヤイチヤしやがって…！』と殺気が放たれて
る。

この殺気はまじて半端ない。

というかその男。

君その横の人彼女でしょ！？

それでいいのか、え？

それはともかく
閑話休題。

漸く落ち着いた月崎と歩き出す。

「お前、意外に恥ずかしがり屋なんだな。」

「うつ…蒸し返さないでほしいわ。折角の、その、デートなのに。」

あり、やっぱり顔が赤い。

恥ずかしいならデートとか言わなきゃいいのに。

……さっきと反応が違うことには気付かない俺だった。

そんな感じで歩いていると、前方に人だかりが出来ていた。

気になったのでそこに向かっていくと、自分のペースを取り戻したらしい月崎が含みありげな笑いをしていた。

人だかりの中心を覗き込むと、昨日桜咲さんと戦っていたゴスロリ神鳴剣士が、桜咲さんに手袋を投げつけていた。

ヨーロッパだかの決闘の申し込みだっけ？

なんかよく分かんないけど、あとでデカイ橋のところでドンパチやるそうさ。

ここじゃあ話し声が聞こえにくいな…。

まあ、いいか。

一度人だかりが解散してから、俺達は桜咲さんのところに向かった。

「桜咲さん。」

「っ！？何者！…ああ、鑓先生に月崎。」

「大変みたいね。」

「あの人、なんか怖いんよ…」

「木乃香、大丈夫よ。安心しなさいな。私達がついてるわ。」
怖がる木乃香を月崎が慰める。

流石、転生者だけあって精神的に大人なんだな。

気を取り直して、4人で橋に向かう…途中で、夕映達とバツタリ会った。

あー、追いかけてたのか。出歯亀か。

夕映に魔法関係のことであると伝えようと目配せする。しかし、目を逸らされた。何故に？

そのままみんなで橋に向かっていく。

橋に着くと、ゴスロリ神鳴剣士が百鬼夜行だとかいうちび式神どもを出し、桜咲さんに向かっていった。

俺は…またしても師匠だった。

「ちょ、鬼村先生と闘うんじゃないんすか!？」

「依頼主からの命令よ。あーもうム力つく!ぶっ飛べ糞弟子!」

「八つ当たりイイイイイ!？」

師匠が四肢に付けた錘を外した。

ッ!ヤバイ!

「ば、場所移しますよ!」

「応!!」

俺も抑えまくっていた気を全て解放する準備をし、2人同時に別の場所に移動した。

やって来たのはシネマ村から少しのところにある山。
人は誰もいない。

俺は抑えまくっていた気を全て解放し、仮面を作り出す。

「トレース・オン
投影開始」

『天鎖斬月』

そして俺の愛刀、真っ黒な日本刀。

師匠から放たれる異常な量の闘気。

俺たちは一瞬向かい合い、同時に飛び出した。

俺は動きを全て体に任せて闘う。

勝手に動くような状態なのだ。

パツと見本気の攻撃に見える俺の斬撃は九割がフェイクで、避けられた動きを利用して急所へと攻撃を送る。

殺す気でやる。

5分後。

押し気味の俺は仮面で人知れず笑みを浮かべた。

刀を何度も形の違うものに換装し、師匠のリズムを崩していき、自分に有利なペースを作っていく。

しかし師匠は何より、有り得ないほど速いのだ。むしろ疾いのだ。

師匠が普段付けている錘は80kg。一個で。

四肢全ての錘の合わせた重さは、320kgにもなるのだ。

俺も付けて動けるが、超とろい。

どんくらいかというと、格闘技をやったことがない一般人くらい。

その状態で俺の格闘技と同じだけ強いんだから感服である。

戦闘を続けていくうちに、師匠の顔に苛立ちが見え始めた。

その苛立ちは徐々に募っていき、あるとき師匠がついに後ろへと距離を取る。

「そういえば、今銀に一つ秘密を暴露するわ。」

「アタシも、転生者よ。」

——え？

まじ？

というか何故今？

「何故か？それは今から銀に見せるもののためよ。」

？見せるもの？

あ…

転生者…つまりは…

「そう、見せてあげるわ、アタシの能力。」

空気が、弾けた――。

22 秘密の暴露はいつも突然です。（後書き）

銀次のアーティファクトはまあ、分かる人は分かるかな？

23 戦闘シーンのみです。(前書き)

クオリティに自信がない(キリッ

23 戦闘シーンのみです。

俺は咄嗟に右に跳んだ。

今まで俺のいた場所を師匠だったナニカが通過していく。

俺は余波で2 m程吹き飛ばされた。

「八つ当たりでこれとか、洒落んならねえ…ッ！」

「これがアタシの貰った能力『獣化』。どんな獣にもなれるわ。勿論、幻獣にも、ね。」

愚痴る俺に返答した師匠の姿は青白く輝き、紫電を纏う虎。

「白虎…ってやつか。」

「御名答。銀にこれが破れる？」

女言葉で喋る巨大な虎、というのも中々シユールだが、口に出したら殺されかねない。

「だあもう！こうなりや最後の手段だ！師匠にも見せてない能力も出すぞ！」

やけになって怒鳴る俺にまだ隠している能力があつたのね、と言う師匠。

本当は見せたら嫌われるんじゃないかとか思っていて隠していたん

だが…転生者なら大丈夫だろう。

ウヴァリツ！！

「これが『翼』です。」

鈍い痛みを感じながら俺は翼を広げる。

恐らく仮面の奥から覗く瞳は紅く染まっているだろう。

「！へえ…黒い翼、ね。」

驚く師匠を前に俺は手に持った天鎖斬月を氣に戻すと、全力の4割で背後に槍や剣、刀に矢までを投影する。

「えっと、たしか技名は…『ゲイトオブバビロン王の財宝』だっけか。」

うろ覚えの技名を唱えながら射出の準備をする。同時に手にはかなりの力を込めた槍。銘を『ゲイ・ボルグ突き穿つ死翔の槍』。急所へとまっすぐに進むという属性を持つ。命名はもちろん師匠。

『完璧なのは無理でも、概念付与は可能、か』といって、それからも色々と面倒くさいことになったんだよな…

俺が感傷に耽っている間に師匠は一度だけバキリ！と言っ音を立てると蛇の尾と長めの足を持つ亀へと変わった。

今度は玄武っすか師匠…。

「じゃ、行きます、よッ！」

俺は約150本の武器を弾幕の如く発射させると、それに隠れるように飛び出した。

それに対して師匠はただ背中を向けただけ。
武器は全てかん高い音と共に弾かれ、俺の槍は甲羅に小さく罅を入れただけに終わった。

「相性が悪いな…」

俺は後ろに飛びすすると、師匠に気取られないように双剣を投影した。銘はそれぞれ『干将』と『莫耶』

『。しかしどうして師匠は伝説上の武器ばかり名前をつけるんだろうか。

まあキーワードを言わなかったのは後で怒られるだろうけど…仕方ないか。

師匠は今度は四肢のみをなにやら青白い、鎧のような鱗をしたモノに変えた。

流れから見て青龍、か？

俺と師匠は同時に飛び出す。

叩きつけるように斬りつけるが、避けられるか手足で防がれるか。

！

そうだ。

「師匠、それ、真似させて貰いますよ。」

俺は四肢に気を集め、師匠と同じ龍の四肢を付けた。

見た目は変えなくてもいいのだが、イメージがしやすければ強度も上がる。

師匠が小さく笑い、

ドゴォン！！！

俺達はぶつかり合う。

俺の龍の鎧は20合も打ち合えば碎けるが、ほぼタイムラグなしに修復する。

技術で言えば師匠が圧倒的なのだが、俺にはかなりの身体能力に、気による身体強化がある。

スピードで翻弄し、なんとか叩き潰すしかない。

だが…

「ちょっとこれは…平行線過ぎないか…？」

「そうね…段々飽きてきたわ。」

「いや、だから今日は…」

「次で決めましょう。」

ええー…

俺は逃げようと足に力を込める。

ガシッ！

「逃がさないよ？」

最悪だわ。

「だあもう！分かりましたよ師匠。後悔しないでくださいね。」

「こっちの台詞よ馬鹿弟子。」

叩き潰してあげるわ、と凄惨に笑う。

まったく、適わねえな。

30m程距離を取り、俺は両腕に今出せる最大出力の虚閃^{セロ}を構え、握り込む。

ビリビリと肩まで服が破け、所々に切り傷ができる。

23 戦闘シーンのみです。(後書き)

F a t e つつこみましたよお。

陰陽剣に呪われた槍。

思いつきでやりました。

なんでも、よかったんです(迫真)

0000 ちょい大幅に改定。というか書き直しのため終了。

サブタイにも書いたように、能力やらなんやらをかなり改定させます。

オリキャラ減らしたり、主人公名前変えたり。

最初の頃の文体も気に食わないので変えます。

というかタイトルだけが同じまったく別の作品になるかも。

というかなる。

どうしても嫌だ、って言う人は感想にでも書いてくれれば・・・人数が集まれば変化量を減らします。はい。

自分勝手ですいません。

おもな理由としては・・・そうですね。自分で読み返して「これはヒドイwwww」と。

本当、すいません。

でき次第投稿して・・・これはそのうち消すと思うんで・・・

うんまあ、はい。

作者名で検索してくださいな。

読みたかったら、ですが。

まあ、念のため、念のためですが、完結にはしないでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9455v/>

ネギま！に入った人。

2011年10月17日17時06分発行